

第32号住居跡（第144～155図）

第32号住居跡は、W・X-20・21に位置する。西側は第47号住居跡に、南側は第53号住居跡と接している。壁は床面から斜めに立ち上がっており、住居跡は掘鉢状となっている。平面形態は円形である。炉と柱穴を基準とした主軸方位は、N-14°-Wである。規模は長径5.00m、短径5.00m、深さ0.41mである。

柱穴は33本が検出された。このうちP1・P9・P12・P22・P30が主柱穴と考えられる。しかし、同規模の柱穴が他にもあることや、炉が2回以上造り変えられていることから、複数回の建て替えが行われたと考えられる。また、柱穴のうち、P30内からは、深鉢形土器（第148図4）が出土した。P30に埋設された可能性が高く、住居跡廃絶後にピットを利用して土器埋設が行われたと考えられる。出土当時は横倒しの状況であった（第145図）が、埋設時は正位で直立していた可能性がある。

炉は2基が重複して検出された。炉2の炉体土器が、炉1によって半分壊されていることから、炉1が最終的に使用された炉と考えられる。炉1は埋燵炉で、中央には比較的大型の深鉢形土器（第148図1）が埋設されていた。また、炉1内からは多量の土器片が出土した。平面形態は円形で規模は、長径0.62m、短径0.58m、深さ0.33mである。炉2は埋燵炉で、西側部分は重複する炉1によって壊されている。炉体土器（第149図9）は深鉢形土器の胴部分を使用したもので、炉2のやや東側よりに埋設されていた。炉2の平面形態

は円形である。規模は長径0.56m、短径0.50m、深さ0.30mである。

遺物は比較的多く出土した（第147図）。3層まで埋没後、2層の埋没過程で多くの遺物が廃棄されたと考えられる。接合の結果、完形に近い土器は第149図12以外は覆土内からは検出されておらず、破損品が廃棄されたと考えられる。

炉1内の炉体土器から住居跡の時期は中期中葉の勝坂式新段階期である。

第148図～第155図は出土した遺物である。

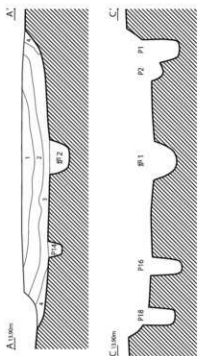
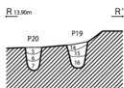
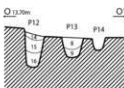
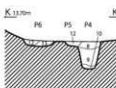
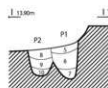
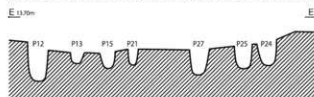
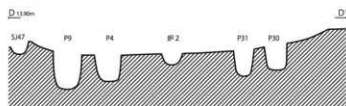
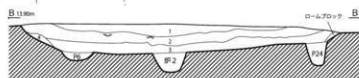
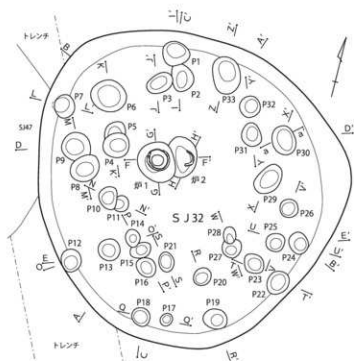
第148図1～7、第149図8～17は器形復元が可能な土器である。

1は炉1に使用された深鉢形土器である。胴下部が欠損するが、炉体土器として使用するため打ち割ったと考えられる。口縁正面には把手が付けられていたと考えられるが、欠損している。故意かどうかは不明である。口縁は傾斜するやや広い面を口唇直下に作り出し、内湾する無文の口縁部を作り出されている。胴上部に文様帯が施文されている。文様は隆帯で区画文が施文され、横8字状文様が3単位と三角形文様が1単位施文される。区画文内には、沈線文や刺突文で文様が施文されるが同一のものはなく、刺突の形状や沈線文の有無をつけて区画間に変化を持たせている。胴下部は地文のみで、0段多条R.Lの縄文を条が縦方向に近くなるよう斜め方向に施文されている。口径28.2cm、残存高25.8cmである。

2は円筒状の深鉢形土器の胴部の破片である。胴上部の文様帯が残存している。文様帯は刻みを施す隆帯によって区画される。区画内には沈線

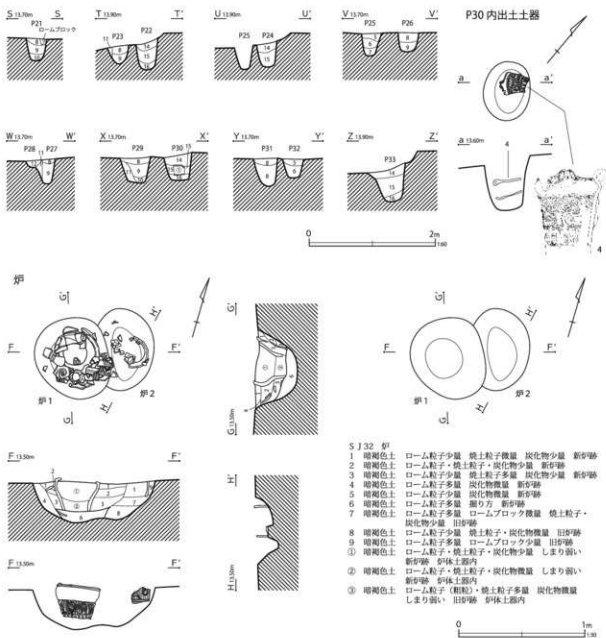
第26表 第32号住居跡柱穴計測表（第144・145図）

番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ
P1	41.0	56.4	P2	43.0	44.2	P3	44.0	64.6	P4	41.0	42.3	P5	38.0	8.2
P6	59.0	10.5	P7	37.0	55.1	P8	49.0	18.7	P9	49.0	58.0	P10	36.0	59.6
P11	26.0	20.6	P12	36.0	61.6	P13	34.0	30.2	P14	29.0	22.8	P15	35.0	33.0
P16	34.0	49.0	P17	21.0	20.1	P18	30.0	41.6	P19	38.0	39.3	P20	30.0	35.8
P21	31.0	36.4	P22	39.0	51.2	P23	35.0	29.4	P24	34.0	40.2	P25	31.0	36.9
P26	31.0	32.0	P27	30.0	40.3	P28	28.0	11.3	P29	52.0	41.2	P30	48.0	44.3
P31	38.0	44.1	P32	34.0	32.0	P33	59.0	62.5						



- S J32
- 暗褐色土 ローム粒子少量 炭化物微量 黒色強い
 - 暗褐色土 ローム粒子少量 ロームブロック微量
 - 暗褐色土 焼土粒子・炭化物少量 遺物多量
 - 暗黄褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック少量
- ビット
- 暗褐色土 ローム粒子（粗粒）・炭化物少量
 - 暗褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック微量
 - 暗褐色土 ローム粒子・ソフトローム多量
 - 暗褐色土 ローム粒子（粗粒）多量 ロームブロック・炭化物微量
 - 暗褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック少量
 - 暗褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック微量
 - 暗褐色土 ソフトローム混入
 - 暗褐色土 ローム粒子多量
 - 暗褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック少量
 - 暗黄褐色土 ソフトローム主体
 - 暗褐色土 ローム粒子（粗粒）多量 焼土粒子・炭化物少量
 - 暗褐色土 ローム粒子（粗粒）少量 ロームブロック微量
 - 暗褐色土 ローム粒子多量 ソフトローム混入

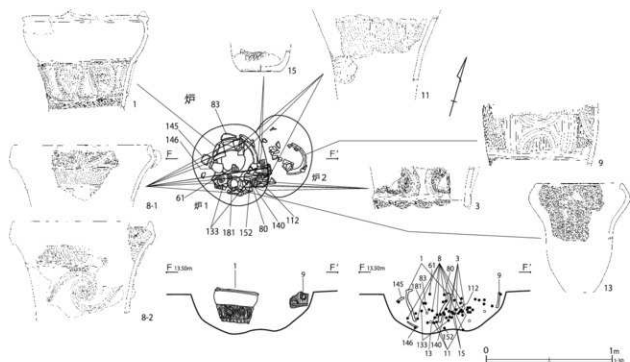
第144図 第32号住居跡（1）



三叉文などが施文されている。胴下部は0段多条LRの縄文を地文として施文される。残存高15.9cmである。

3は深鉢形土器の胴部の破片である。胴上部の文様帯が残存している。文様帯は隆帯によって区画される。楕円区画が施文され、その内側には浮き彫り状に文様が施されている。隆帯上には刻みが施される部分と施されない部分がある。地文は単節LRである。残存高9.0cmである

4はP 30 内から出土した深鉢形土器である。底部は欠損している。やや狭い無文の口縁部で、口唇部には刻みが入られ、その下に1本沈線を巡らして器面に段差がつけられている。1箇所眼鏡状突起が貼付される。胴上部には2段の楕円区画文が施文され、胴下部は縦位と考えられる区画文が施文される。上部2段の楕円区画文は隆帯で施文され、上段下段の区画は不らずして施文される。区画文は4単位だが上段は2単位が独立し、残り



第146図 第32号住居跡遺物出土状況(1)

2単位は連結させ、連結部分の隆帯が共有となっている。下段も同様だが、下段の連結部は部分的で一方の区画文は円形に近くなっている。楕円区画の両側は耳たぶ状に張り出させているが、2段目の連結部は偏平にしている。区画内の文様は沈線によって施文されるがすべて異なっている。下部は縦位区画文を沈線で10単位区画され、渦巻文が施文されるものと、短沈線を方形に施文されるものに分かれるが、突起下は方形文と渦巻文を2単位ずつ施文され、他の6単位は方形文と渦巻文が交互に施文されている。下部の区画内の文様も同一にならないよう変化をつけている。口径15.2 cm、残存高20.7 cmである。

5はキャリパー形の深鉢形土器で、口縁から胴部の破片である。口縁部には眼鏡状突起が貼付されている。口縁部には刻みをもつ隆帯で半円形状に区画され、内側は蓮華文が施文されている。頸部は無文で、隆帯が巡らされ、多段状となっている。推定口径29.0 cm、残存高19.1 cmである。

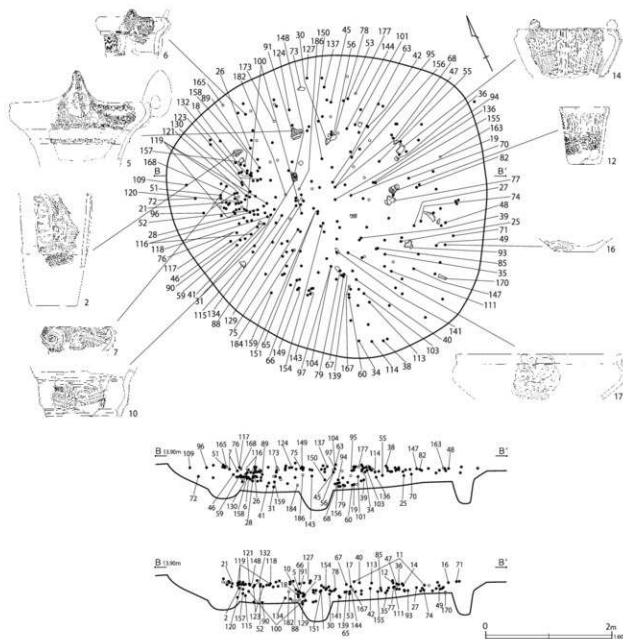
6は深鉢形土器の口縁部から胴上部である。口

縁部は突起を持っている。胴部は円筒状である。文様は刻みを持つ隆帯で楕円区画文を多段に施文されている。区画内は縦方向に半截竹管で浮彫状に施文している。推定口径14.0 cm、残存高9.8 cmである。

7はキャリパー形の深鉢形土器の口縁部である。口唇部には隆帯は貼付されていない。口縁部文様帯には隆帯で横S字状文を4単位貼付される。地文は燃糸文Lである。推定口径13.8 cm、残存高5.4 cmである。

8-1・8-2は同一個体の深鉢形土器であるが、接合しないため分割して図示した。炉1の上面から検出された。口縁部は多段構成で、狭い無文の口縁部を持ち、1段目の文様帯は隆帯で区画され、区画内には刻みと三叉目を施文されている。2段目は楕円区画文が施文され、区画内には短沈線が縦方向に充填されている。胴部には大型の渦巻文が施文されている。推定口径36.0 cm。残存高14.7 cmである。

9は炉2の炉体土器で、深鉢形土器の胴部分で



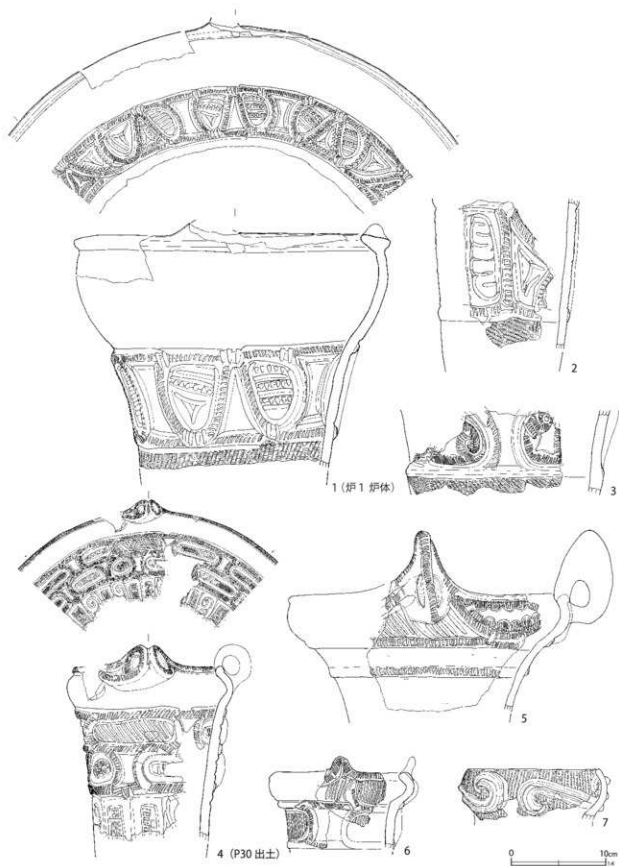
第147図 第32号住居跡遺物出土状況(2)

ある。沈線で文様が施文されている。対向弧線文と渦巻文が交互に施文されるが、それぞれ文様に変化がつけられている。地文は無節Rの縄文である。残存高13.3cmである。

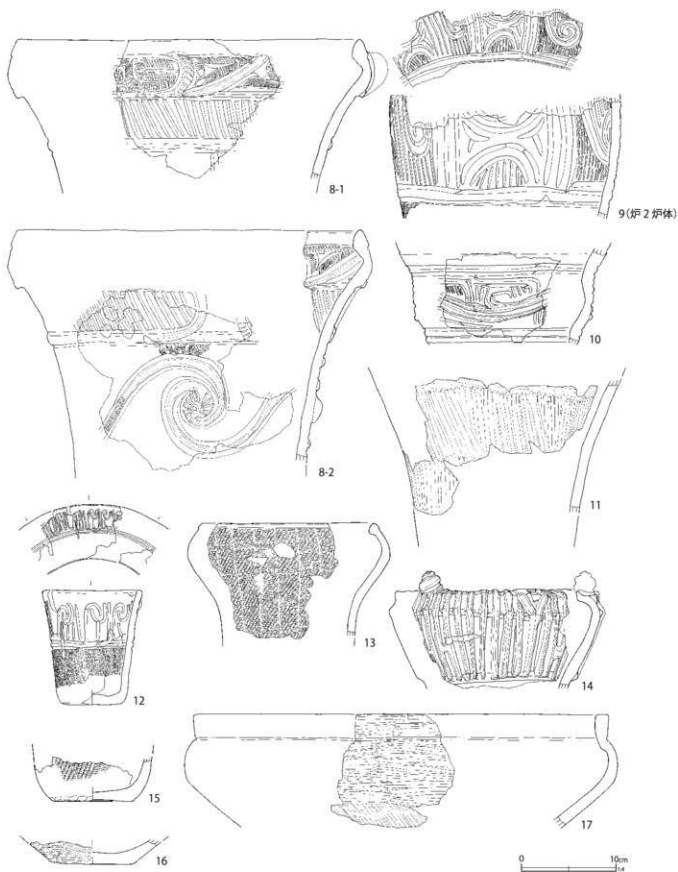
10は深鉢形土器の口縁部から胴上部である。口縁部下がエラのように張り出す。隆帯で横S字状文等が施文される。口縁部と胴部は2本沈線を巡らして区画される。隆帯以外の部分は沈線によって文様が施文される。残存高10.3cmである。

11は深鉢形土器で、無文の胴部のみ残存する。器面は縦方向にミガキ状の調整を行い、口縁に近いところは横方向に調整を行っている。残存高14.2cmである。

12は円筒状の深鉢形土器で小型である。胴上部に文様帯を持つが、沈線で文様が施文される。1箇所円形貼付文が施され、そこが中央になると考えられる。円形貼付文を中心とし、沈線で文様を施文するが、U字と逆U字状文を組み合わせた



第148图 第32号住居跡出土遺物(1)



第149图 第32号住居跡出土遺物(2)

文を基本とし、すべて異なる配置となるように沈線をアレンジして文様が施文されている。胴下部は地文のみで、燃りの細かい燃糸文Rが縦方向に施文されている。口径10.6cm 底径6.3cm 器高12.1cmである。

13はキャリバー形の深鉢形土器の口縁部から胴部の破片で、地文のみが施文される。地文は単節RLの縄文で縦方向に施されている。推定口径18.0cm、残存高12.0cmである。

14は隆帯を貼付して文様を施文している。縦方向に貼付された隆帯は一部横に隆帯を貼付して連結するものや、Y字状に貼付されるものがある。口縁部には円文が施される。口唇部には小渦巻状の突起が貼付される。推定口径17.0cm、残存高12.5cmである。

15は深鉢形土器の底部である。単節RLの地文のみがやや斜め方向に施文されている。底部と胴部のつなぎ目には製作時の指頭圧痕が残っている。底径8.6cm、残存高4.2cmである。

16は浅鉢形土器の底部で、底径9.0cm、残存高2.6cmである。

17は浅鉢形土器の口縁部から胴部である。ほぼ垂直に立ち上がる無文の口縁部と胴部は沈線を巡らして区画されている。胴上部が膨らみ、最大径を持つ。赤彩の痕跡がごく僅かに残される。推定口径44.0cm、残存高12.0cmである。

第150図18～60、第151図61～94、第152図95～123、第153図124～160は土器の破片資料である。加曽利E式系のキャリバー形の深鉢形土器は含まれていなかった。

18～29は阿玉台式系と勝坂式系の折衷的な深鉢形土器である。18・19は口縁の突起部分である。20は爪形文とその内側に波状文が施文される。21～25は角押文が施文される。

30・32・33は刻みを持つ隆帯脇にキャタピラ状の爪形文が施文される。藤内式期である。

31・34～40は勝坂式末葉の深鉢形土器である。

刻みを持つ隆帯とそれに沿って沈線が施文される。その内側に爪形文や蓮華文が施文されている。

41～123は勝坂式末葉から加曽利E I式初頭の深鉢形土器である。

41～63は刻みを持つ隆帯とそれに沿って沈線文が施文されるもので、その内側は短沈線によって文様が施文される。42は短沈線の内一部に結節沈線文が施文されている。

64～66・76は隆帯上には交互刺突文が施文される。76は口縁部の突起部分である。

67・68は隆帯に刻みが施文されない。

69～75は沈線で文様が施文される。

77～79に口縁部に眼鏡状突起が貼付される。

80～107は加曽利E式初頭と考えられる。83～92は条線が地文として施文される。80・81・83～88・91はキャリバー形で、89・90はバケツ状の器形である。92は頭部の破片である。

93・94は口縁部が無文となる。93は波状口縁で、口唇部は面を持たせている。

95～106・109・110は地文が施文されるもので、95は口唇部から隆帯を垂下させている。96は朝顔状に開く器形で、口唇部は肥厚させている。

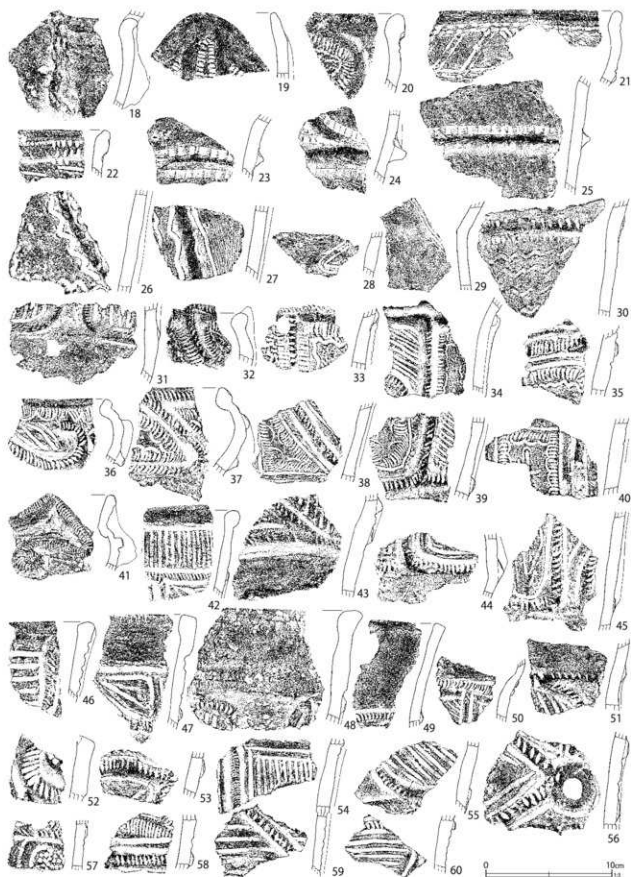
107は胴部が膨らむ器形で、沈線が横方向に施文される。

108は連弧文系の土器である。

111～115は曾利式系の土器である。

116～123は、土器の色調が灰褐色となる同一個体の土器で、北陸系の土器と考えられる。口縁部は欠損するが、胴上部は隆帯で文様が施文される。隆帯中央に沈線を施文し分割し、片方の隆帯上に刻みが施文される。隆帯の変化点には渦巻き状に盛り上げた文様が貼付されている。隆帯以外の部分には沈線で渦巻文などが施文される。胴下部とは沈線で区画される。胴下部は地文のみが施文される。地文は単節RLの縄文で、縦方向に施文される。

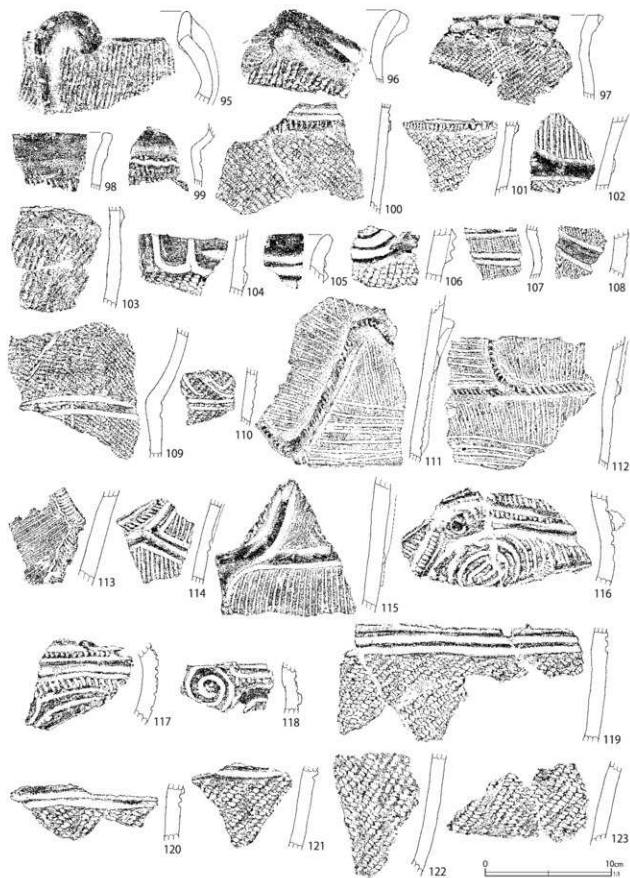
124～142は地文のみが施文される深鉢形土器



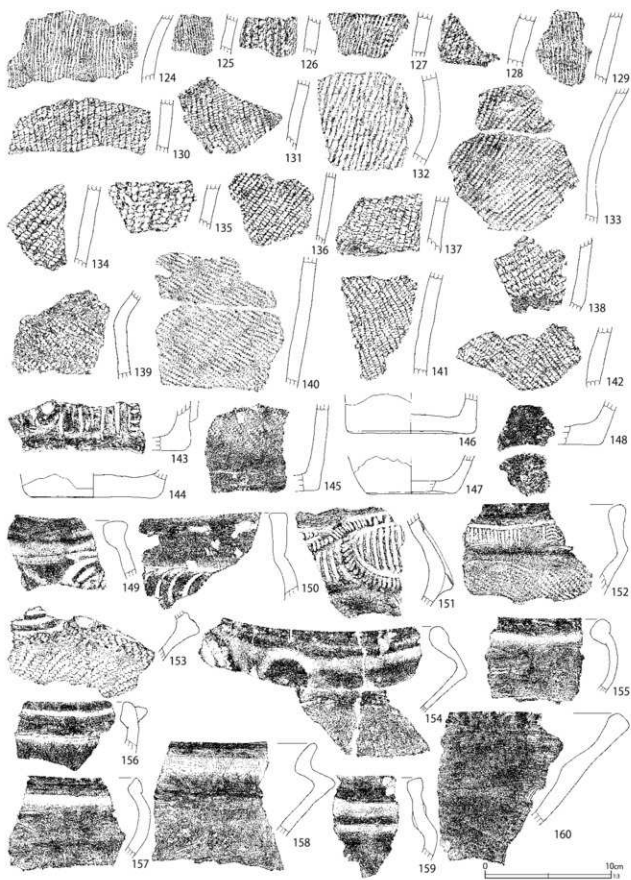
第150图 第32号住居跡出土遺物(3)



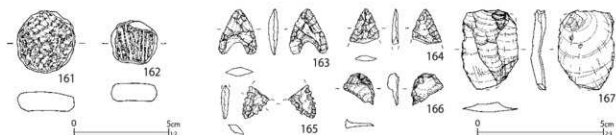
第151图 第32号住居跡出土遺物(4)



第 152 图 第 32 号住居跡出土遺物 (5)



第153图 第32号住居跡出土遺物(6)



第154図 第32号住居跡出土遺物(7)

である。

143～148は底部である。143は刻みを持つ隆帯と沈線が縦方向に施文されている。145は単節LRの縄文が施文されている。他の器面は無文である。148は底面に網代痕が残されている。

149～160は浅鉢形土器である。赤彩の痕跡はいずれも認められなかった。149～154は肩部に文様が施文される。149・150は沈線で文様が施文されている。151は隆帯で文様を区画し、区画内に短沈線が施文されている。152・153は胴部に地文が施文されるものもある。地文は単節RLの縄文で、152は横方向、153は縦方向に施文される。154は隆帯で文様が施文されている。156は口唇部を肥厚させ、肥厚した面に沈線が施文されている。160は内面に段差を持つものである。

第154図161・162は土製円盤である。深鉢形土器の胴部の縁辺を打ち欠いて円形に加工されている。器面には地文が残されている。161は単節RLの縄文を、162は条線である。

第154図163～167、第155図168～185は出土した石器である。

163～165は石鏃である。163は無茎で、基部の袂は深く逆U字状に入っている。164は基部を欠損している。165は脚部のみが残存するもので、側縁は鋸歯状に加工されている。

166・167は使用痕を有する剥片である。166は剥片の縁辺に微細な剥離が認められる。167は縦長剥片で、側縁に微細な剥離が認められる。

168・169は磨製石斧である。168は刃部を欠

損するもので、断面形から定角式で基部は尖っている。側面には敲打痕や剥離があり、欠損後に敲石として使用された可能性がある。169は基部の一部が残されるもので、残された部分から定角式と考えられる。側面や表面には敲打痕が残されており、破損後敲石として使用されたと考えられる。他にも刃部が出土したが、第37号住居跡出土の基部側の磨製石斧と接合された。接合された実測図は第37号住居跡に示した。

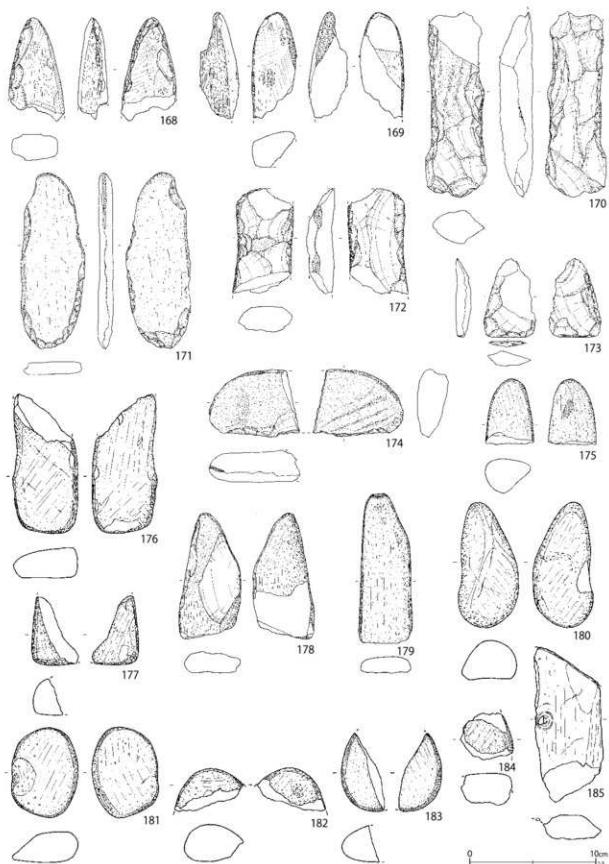
170～173は打製石斧である。170は基部が欠損するもので、短冊状の器形である。171は素材となる礫の縁辺を最低限の加工が施されたもので、表裏面に大きく自然面が残されている。また、側縁には敲打痕が認められる。172は基部と刃部を欠損する。173は表面と基部を欠損する。刃部は平刃である。刃部の先端面に研磨面が残されている。研磨されたものと考えられるが、意図は不明である。

174はスクレイパーである。楕円形状の礫を横長に使用して、下辺に剥離調整を行い刃部が作り出されている。刃部以外は自然面が両面に大きく残されている。上辺には敲打痕が残されている。

175～179は敲石である。棒状に近い礫を敲石として使用している。側縁部分に敲打痕が残されている。器面は滑らかで、磨面としても使用していると考えられる。

180～184は磨石である。182・183の表面や側縁には敲打痕が認められる。

185は石皿である。

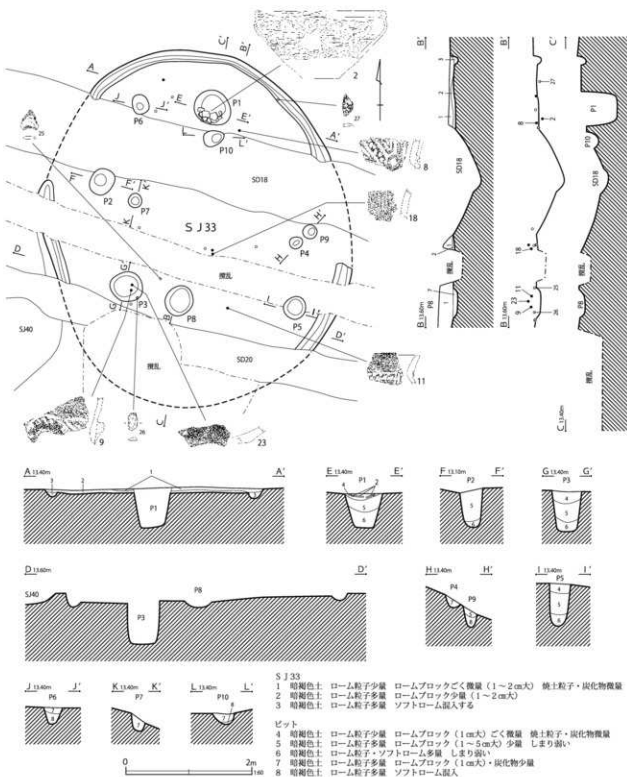


第155图 第32号住居跡出土遺物(8)

第33号住居跡 (第156～158図)

第33号住居跡は、V-15グリッドに位置する。近世の第18・20号溝跡が住居跡内を東西方向に横断している。西側には第40号住居跡と接して

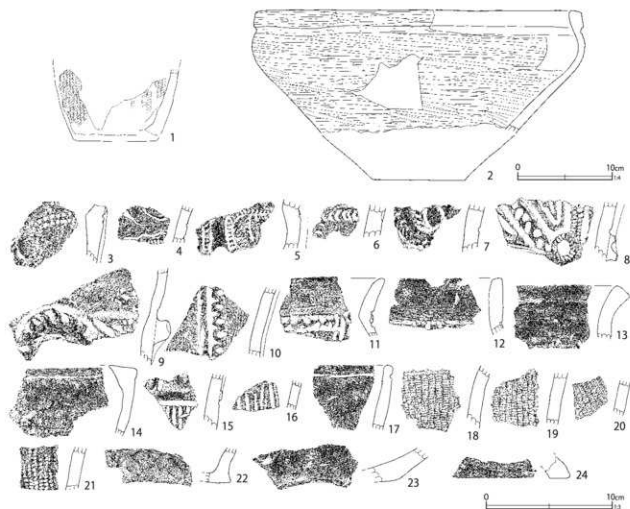
いる。近世の溝跡によって上面が削平されている。そのため掘り込みはごく浅く残り、覆土はほとんど検出されなかった。壁溝が1条巡っている。平面形態は楕円形である。平面形態を基準とした主



第156図 第33号住居跡

第27表 第33号住居跡柱穴計測表 (第156図)

番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ
P 1	60.0	54.0	P 2	42.0	69.1	P 3	53.0	66.8	P 4	22.0	18.8	P 5	37.0	67.1
P 6	31.0	27.1	P 7	23.0	25.4	P 8	50.0	9.6	P 9	23.0	33.0	P 10	35.0	22.0



第157図 第33号住居跡出土遺物(1)

軸方位は、N-6°-Eである。規模は推定される長径5.24m、短径5.10m、深さ0.29mである。

柱穴は10本が検出された。そのうち、P1・P2・P3・P5が主柱穴と考えられる。主柱穴は5本あったと考えられるが、1本は第18号溝跡によって失われている。

炉は検出されなかった。住居跡の中央が、第18号溝跡によって炉も失われたと考えられる。

遺物の出土は少なかったが、P1内からは、第157図2の浅鉢形土器が出土した。

出土した土器の大半は勝坂式終末期である。住

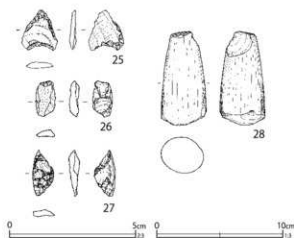
居跡の時期も同時期と考えられる。

第157図・第158図は出土した遺物である。

第157図1～24は出土した土器である。1・2は器形復元が可能な土器である。

1は、深鉢形土器の胴部下半の破片で、胴部には地文のみが施文されている。地文は単節RLの縄文で、条が縦方向になるよう斜め方向に施文されている。残存高6.9cmである。

2は、浅鉢形土器の口縁部から胴部で底部を欠損する。垂直気味に立ち上がる口縁部は狭く、胴部とは沈線を経由して区画されている。器面は丁



第158図 第33号住居跡出土遺物(2)

率に調整が施されている。推定口径32.0cm、残存高13.0cmである。

3～24は土器の破片資料である。3・4は阿玉台式土器で、3は角押文が施文されている。5は隆帯脇に爪形文を施文している。6は爪形文が施文されている。7～16は勝坂式末葉の土器である。8・9は隆帯上の刻みが、刺突状となっている。12～14は無文の口縁部分である。15・16は円筒形の深鉢形土器の文様部分である。17は鉢形土器の口縁部分である。

18～21は地文のみが残る深鉢形土器の胴部の破片である。

22は深鉢形土器の底部、23は浅鉢形土器の底部である。24は台付深鉢形土器の台部分である。

第158図25～28は出土した石器である。25は石鏃で、裏面には大きく風化面が残存している。26はくさび形石器で表面に自然面が残存している。27は使用痕を有する剥片で、縁辺に剥離が施されている。28は乳棒状の磨製石斧である。

第34号住居跡(第159～172図)

第34号住居跡は、V-15・16グリッドに位置する。南側に重複する第38号住居跡を壊している。近世の第18号溝跡が中央を東西方向に横断して覆土を壊していたが、床面までは達していなかった。比較的深く掘り込まれる住居跡で、壁の立ち上がりは垂直に近いが全体的には揺鉢状となっている。平面形態は隅丸方形である。平面形状と炉と柱穴を基準とした主軸方位は、N-40°-Wである。規模は長径5.36m、短径4.84m、深さ0.70mである。

柱穴は25本が検出された。そのうちP1・P2・P3・P4・P5が主柱穴と考えられる。多数の柱穴が掘り込まれており、主軸を変えて複数回の建て替えが行われた可能性がある。

炉は中央やや北側から検出された。埋甕炉で、炉の中央やや南から第163図1の炉体土器が出土した。炉体土器を取り外した壁面に、焼土ブロックや炭化物が多量に検出された。炉の平面形態は隅丸方形である。規模は、長径1.08m、短径0.90m、深さ0.30mである。

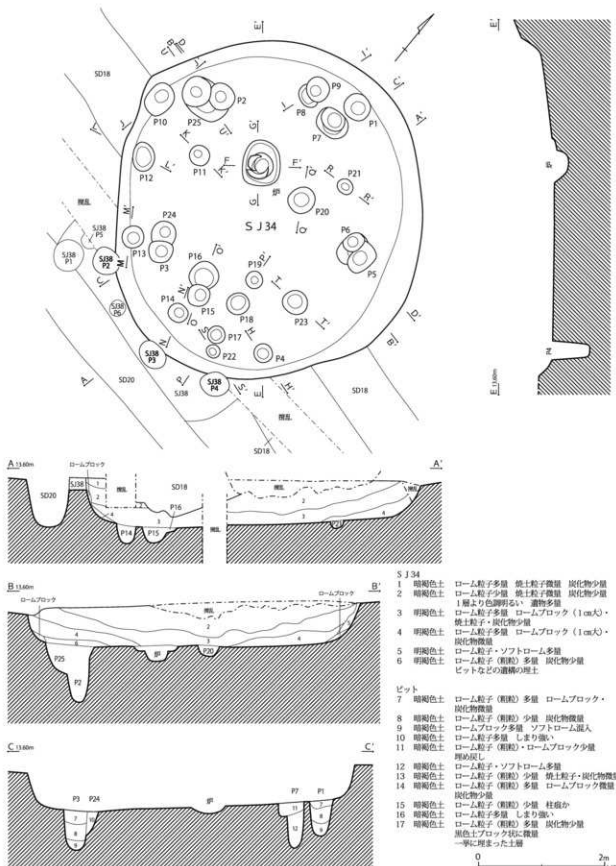
遺物は住居跡の中央に分布の中心があった。完形に近い複数の土器が押し潰された状況で主に2層中から出土し(第161図)、3層埋没後に廃棄されたと考えられる。出土した土器の時期は炉体土器とほぼ同時期であることから、住居跡廃絶後に短期間で埋没が始まった住居に土器が廃棄されたと考えられる。

炉体土器から住居跡の時期は、中期中葉の勝坂式終末期と考えられる。

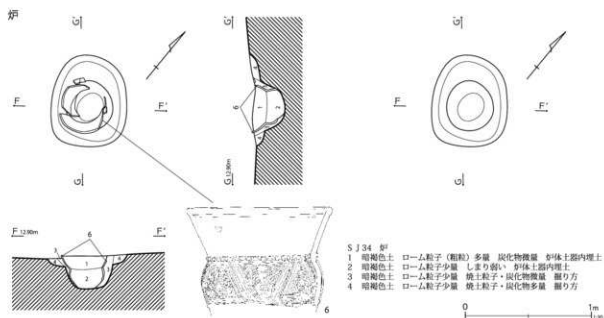
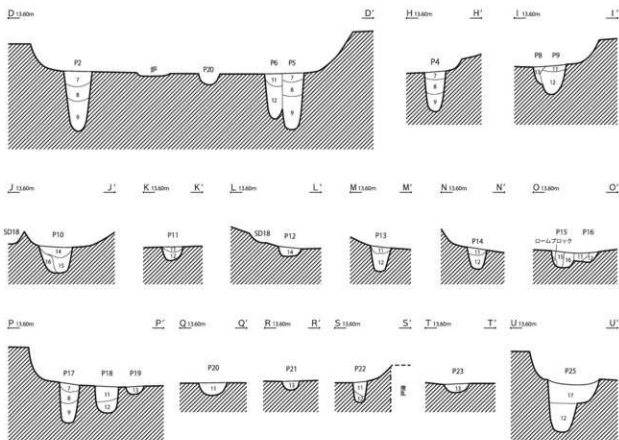
第162～172図は出土した遺物である。

第28表 第34号住居跡柱穴計測表(第159・160図)

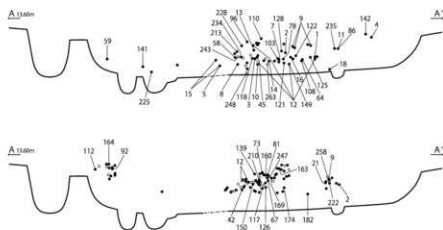
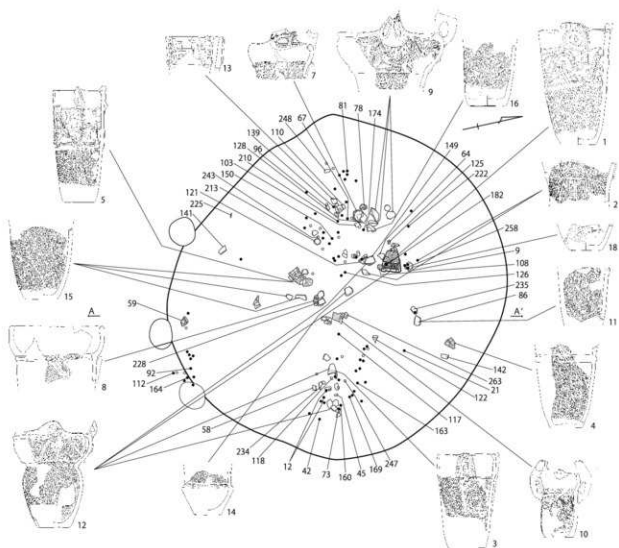
番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ
P1	44.0	60.0	P2	43.0	96.6	P3	40.0	63.3	P4	31.0	54.0	P5	51.0	84.9
P6	53.0	69.8	P7	52.0	73.5	P8	37.0	30.0	P9	37.0	45.5	P10	52.0	38.0
P11	32.0	18.8	P12	46.0	13.1	P13	35.0	38.5	P14	32.0	31.2	P15	37.0	25.1
P16	47.0	16.2	P17	28.0	58.8	P18	35.0	41.0	P19	28.0	12.8	P20	43.0	18.4
P21	26.0	12.6	P22	22.0	35.8	P23	39.0	10.9	P24	32.0	63.4	P25	80.0	82.8



第159図 第34号住居跡(1)



第160図 第34号住居跡(2)



第 161 图 第 34 号住居跡遺物出土状況

第162図1～5、第163図6～11、第164図12～18は器形復元が可能な土器である。

1は円筒状の深鉢形土器である。ほぼ完形である。歪んだ器形となっており、底部を平らに置く 것과後方向に傾斜している。無文の口縁で、胴上部に文様帯がある。口縁には大把手と小把手が1単位ずつ貼付される。把手部分を境界に文様帯は大きく2分割されている。正面右側の区画は区画内を大方形と小方形の2区画に細分割されており、文様帯の区画分割は3単位が意識されている。大把手下には渦巻文が施文される。把手から区画下の隆帯まで隆帯を垂下させて、そこからV字状に折り返し区画の上部につなげ、端部は渦巻文となっている。方形の区画内には短沈線や三叉文、渦巻文が施文される。小方形内は隆帯で更に2分割される。左側の区画内は、2単位の端部を渦巻く隆帯が貼付されている。区画内には渦巻文や三叉文が施文されている。口径19.0 cm、底径9.0 cm、器高32.0 cmである。

2は深鉢形土器で、胴部のみ残存している。胴上部に文様帯を持つ。文様帯は隆帯で区画され隆帯上には刻みが施される。区画内は三叉文や斜沈線などが施文される。地文は燃糸文Rである。残存高11.1 cmである。

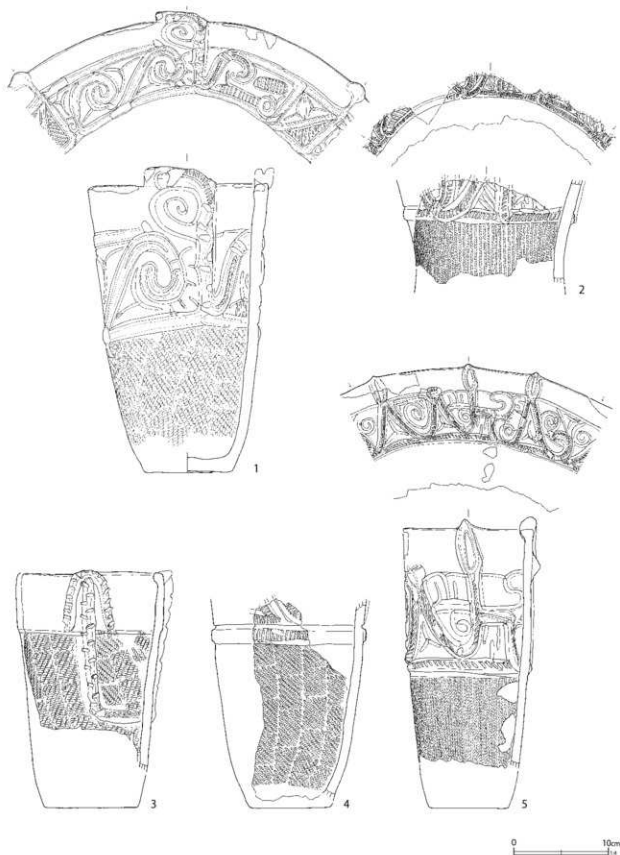
3は円筒形状の深鉢形土器で、底部を欠損している。口縁部は無文である。胴部とは器面に段差をつけて区画される。口縁部には逆U字状文を隆帯で貼付され、この中央から隆帯を垂下させ胴中央やや下でクランクさせている。他は、胴部に地文が施文されるのみである。隆帯には竹管によって刺突が施されている。またクランクさせた後は隆帯上に地文が施文されている。地文は単節RLの縄文で、斜めから縦方向に施文されるが部分的に横方向にも施文されている。推定口径15.5 cm、残存高20.3 cmである。

4は円筒状の深鉢形土器で、胴部のみ残存している。胴上部に文様帯を持ち、隆帯と沈線で文様

が施文される。隆帯上に刻みを施し、沈線間も同様に刻みが施される。胴下部は地文のみ施文される。地文は単節LRの縄文を縦または横方向に施文されている。残存高21.4 cmである。

5は円筒状の深鉢形土器で、底部を欠損する。胴上部に文様帯を持っている。口縁には3単位の小突起を持ち、突起部分に楕円形状の隆帯による貼付文が施文され、そこから刻みを持つ隆帯を連結させて、文様帯に隆帯で三角形の区画が作り出されている。区画ごとに渦巻文、クランク文が区別して施文され、同一文様は施文されない。区画内には三叉文や渦巻文などが沈線で施文される。クランク文が施文される区画内には、浮き彫り状の幅広い渦巻文が施文されている。胴下半とは刻みを持つ隆帯で区画される。地文は燃糸文Lで、胴下半のみに施文される。口径13.8 cm、残存高26.5 cmである。

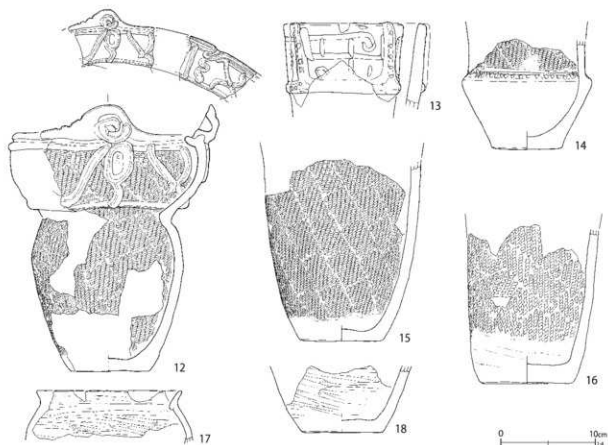
6は炉体土器に使用された深鉢形土器の口縁から胴部で、胴下部から底部は使用されていない。直線的に開く無文の口縁部から括れ、胴上部に丸みを持っている。胴上部の文様帯部分が打ち割られている。口縁との区画は円形刺突文が施す隆帯が巡らされている。下側は縄文を施文する隆帯を巡らして区画されている。区画内は隆帯で三角形に近いものもあるが台形上に施文され、文様は上下入れ子に区画文が8単位施文されていると考えられるが、2単位分は欠損している。区画内には地文と沈線による文様を施文し、上辺が短い区画内には内側を印刻状に凹ませた沈線による三角文が施文され、上辺が長い区画内はすべて文様を変え、つり下げ状に施文された渦巻文、2重に沈線が施文された逆三角文、地文のみと、区画内に施文がされている。また正面台形区画文の左側の隆帯上のみ縄文が施文されていない。地文は単節RLの縄文で、区画内は縦や斜め方向、隆帯上は横や縦方向に施文されている。口径37.8 cm、残存高26.5 cmである。



第162図 第34号住居跡出土遺物(1)



第163图 第34号住居跡出土遺物(2)



第164図 第34号住居跡出土遺物(3)

7は深鉢形土器で、胴下半を欠損している。欠損部はほぼ水平となっている。無文の口縁部には1箇所把手が貼付される。先端部は欠損するが円孔を持つ把手部分を隆帯に貼付され、「蛇」状表現となっている。隆帯上には刻みが入る。胴部には文様帯の上部が残存している。文様帯は隆帯で区画され、三角形に4単位区画される。三角形間には三叉文が施文され、把手下部分は狭く1つのみだが、他は中央を沈線で分割し2単位の三叉文が施文される。三角形文内には沈線を二重に三角形に施文され、三角形内には刺突文を施すが1単位のみ三叉文が施文されている。隆帯上には刻みまたは交互刺突文が施文される。口径15.4 cm、残存高13.0 cmである。

8は深鉢形土器の口縁部から胴部である。丸みを持つ無文の口縁部で、胴部とは隆帯で区画し、胴上部に文様帯を持っている。隆帯による区画内

は、区画に沿った沈線や短沈線が施文される。隆帯上には刻みが施されている。推定口径24.4 cm、残存高14.8 cmである。

9はキャリパー形の深鉢形土器の口縁から胴部が残存している。大型の眼鏡状把手が口縁に貼付され、実測図の口縁部右側には方形で中央に円形のくぼみを持つ小把手を貼付する。口縁部には刻みを持つ隆帯を貼付して区画文が施文され、その内側は沈線で三叉文などが施文される。胴部は地文のみで、0段多条R Lの縄文を縦方向に施文される。推定口径28.0 cm、残存高20.2 cmである。

10は深鉢形土器で、丸みを持つ無文の口縁部には、1箇所橋状把手が貼付される。把手から続く口縁部は段を違えて作られるが段を違える部分には隆帯で渦巻文が貼付される。頸部には隆帯を巡らせて胴部と区画される。隆帯には間をおいて交互刺突文が施されている。地文は撚糸文Lで、

斜め方向に施文される。口径9.0 cm、底径7.6 cm、器高20.5 cmである。

11は深鉢形土器の胴部のみ残存する。隆帯と沈線が胴上部に部分的に残存するが、文様の全容は不明である。地文は0段多条R Lの縄文で、条が縦方向となるように斜め方向に施文されている。残存高14.2 cmである。

12はキャリバー形の深鉢形土器で、口縁部は1箇所波状の突起が貼付される。把手部の表には隆帯で渦巻文、内面には円形のくぼみが施文され、周縁に沈線が巡らされる。把手左側の口唇部には、短沈線状の刻みが内面にかけて施文されている。また口唇部は面を持ち、中央に沈線が巡らされる。口縁部文様は、上下を1本ずつの隆帯で三角形状や蛇行状の文様が施文される。地文は多条R Lの縄文で、斜め方向に施文される。口径19.9 cm、底径8.3 cm、器高28.2 cmである。

13は円筒状の深鉢形土器の口縁部から胴上部の破片である。胴上部は隆帯で区画され、さらに縦方向に隆帯を施文して分割される。区画内は沈線文が施文される。隆帯上には間隔を広く取った刺突文が施文されている。推定口径12.8 cm、残存高9.1 cmである。

14は深鉢形土器の胴下半から底部である。胴下半から底部にかけてそろばん玉状の器形となる。張り出し部分には刺突列が1列施される。底部は無文である。胴部に残る地文は単節R Lの縄文で、条が縦方向に見えるように斜めに施文されている。底径7.4 cm、残存高11.6 cmである。

15は深鉢形土器で、地文のみが施文される胴部から底部である。地文は単節R Lの縄文で、斜め方向に施文される。底径8.9 cm、残存高19.2 cmである。

16は深鉢形土器の胴部から底部である。地文のみが施文され、撚りの粗い単節R Lの縄文を斜めから縦方向に施文される。底部近くは地文施文後に横方向に撫でて整形されている。底径9.8 cm、

残存高16.8 cmである。

17は鉢形土器の口縁から胴部の破片である。無文の土器で、口縁部は短く外反する。推定口径15.4 cm、残存高5.6 cmである。

18は深鉢形土器の底部である。無文だが器面調整は丁寧に施される。部分的に器面が剥落している。底径7.4 cm、残存高7.0 cmである。

第165図19～64、第166図65～107、第167図108～136、第168図137～181、第169図182～227、第170図228～238出土した破片資料の土器である。

19～32は阿玉台式系の深鉢形土器である。胎土に金雲母が含まれるものが多い。19～28は角押文が施文される。

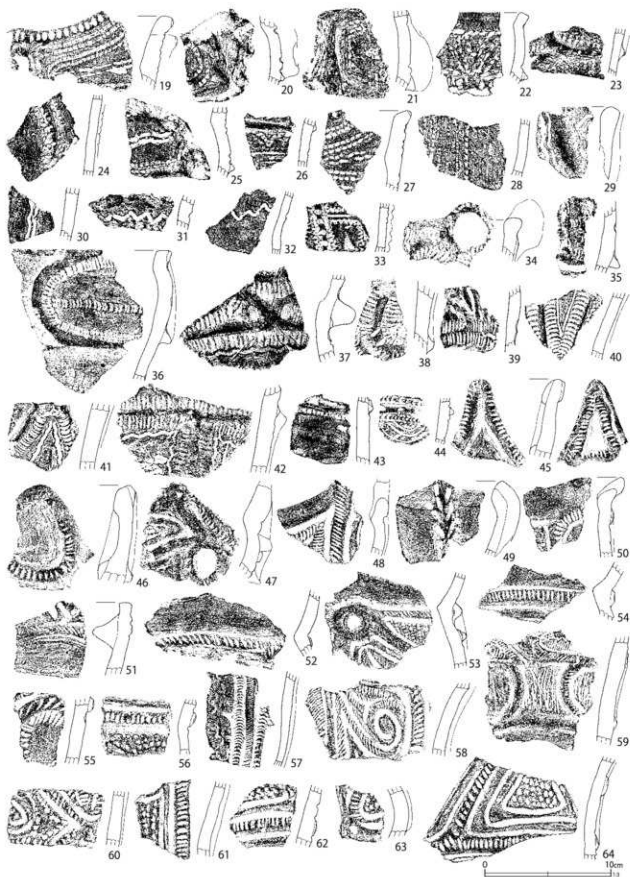
33は貉沢期の深鉢形土器の胴部である。印刻状の三角文様が施文されている。

34～44は隆帯脇に爪形文を施文するもので、40～42はその内側に波状文が施文される。藤内式期の深鉢形土器である。

45～173は勝坂式末葉から加曾利EⅠ式初頭の深鉢形土器である。

45～83は刻みを持つ隆帯と、それに沿って沈線が施文されるものである。45～51は口縁部の破片である。52～54は無文の口縁部と頸部の区画が残っている。55～64は隆帯によって区画された文様内に、沈線によって渦巻文や三角区画文が施文される。沈線間に刻みを入れるものやペン先状の三角押文が施文されるものがある。65～70はキャリバー形の器形の口縁部文様帯である。72～83は隆帯による区画内の文様が沈線のみとなる。84～93は、隆帯は施文されず沈線のみで文様が施文されるものである。

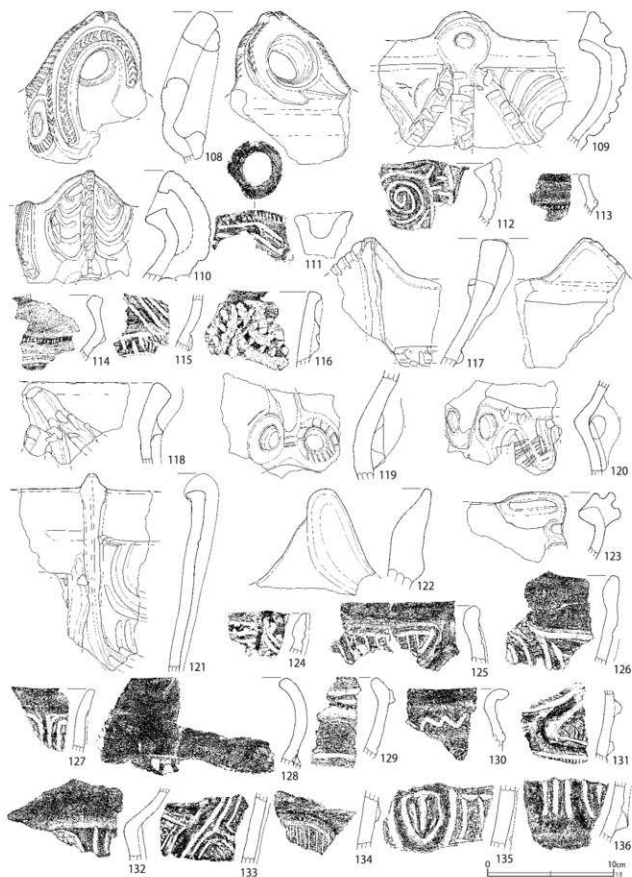
94～107は地文が施文されるものである。94～96は、キャリバー形の深鉢形土器の口縁から頸部であると考えられる。97～104は刻みが施される隆帯で区画される。103の隆帯上には交互刺突文が施文され、胴部に隆帯で懸垂文が施文される。懸垂文上には、瘤状の突起が貼付されてい



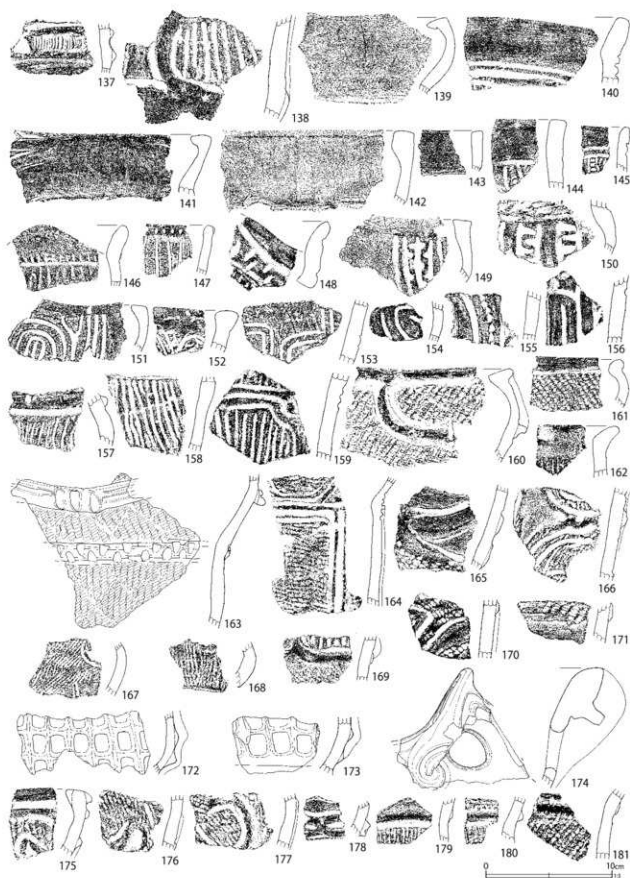
第165图 第34号住居跡出土遺物(4)



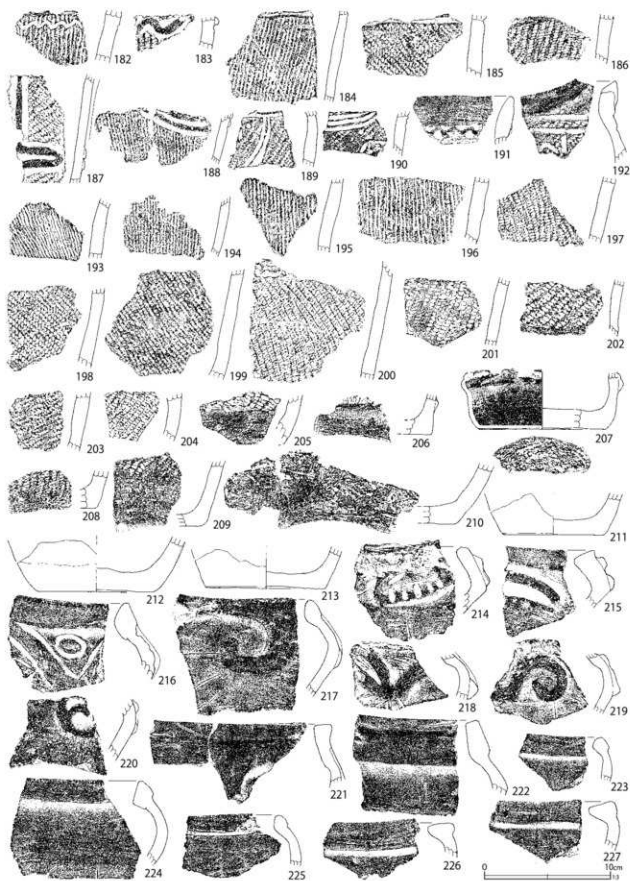
第166图 第34号住居跡出土遺物(5)



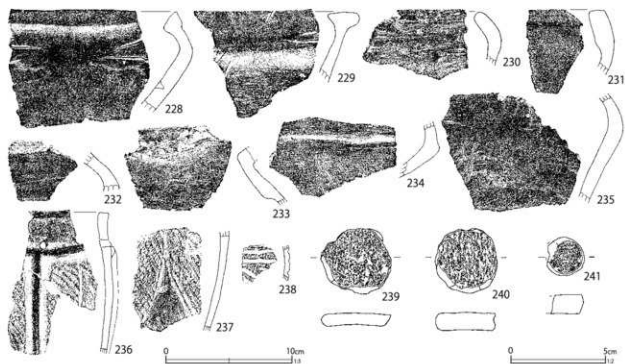
第167图 第34号住居跡出土遺物(6)



第 168 图 第 34 号住居跡出土遺物 (7)



第169图 第34号住居跡出土遺物(8)



第170図 第34号住居跡出土遺物(9)

る。105～107は円筒状で、隆帯は貼付されない。105は爪形文とそれに沿って波状文が施文される。

108～138は、隆帯上の刻みは交互刺突や部分的に施文されるものや、刻みが施文されない隆帯が施文される深鉢形土器である。区画内の文様も沈線が主体を占め、細かな文様は施文されない。108～120の隆帯上には、交互刺突文などが施文される。108は橋状把手が口縁に貼付されるもので、隆帯上にはへ字に刻みが施されている。110は中空の把手が貼付される。119・120は眼鏡状突起を頸部に貼付される。121～138は隆帯上に文様は施文されない。

139～156は沈線のみが施文される深鉢形土器であるが、沈線には交互刺突文が施文されるものもあるが沈線以外の文様は施文されないものが主体となす。

157～159は曾利式の深鉢形土器である。

160～171は地文が施文される深鉢形土器で、隆帯上に細かい刻みが施されるものではなく、加曽利E式初頭の土器である。163は口縁が開く器形

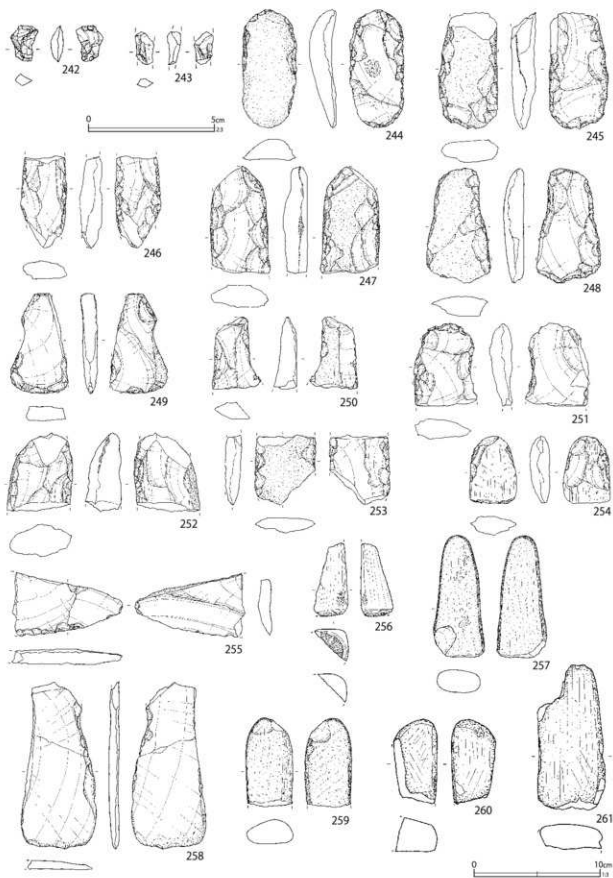
で、肥厚する口縁には、沈線文や刺突文が施文されている。170・171は、隆帯上に縄文が施文されている。

172・173は微隆起伏の隆帯を縦横に施文する深鉢形土器である。

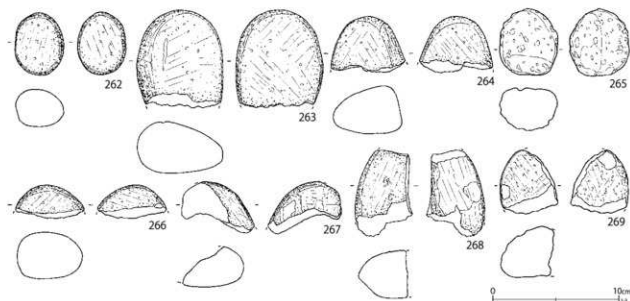
174～190は加曽利E式系のキャリパー形の深鉢形土器である。174は把手部分である。175～178は口縁部の破片である。隆帯で渦巻文や剣先文が施文される。179～181は頸部から胴部の破片である。182・183は頸部の破片である。182は沈線で、183は隆帯で波状文が施文されている。184～186は沈線で頸部と胴部が区画されるもので、胴部は地文のみが施文される。187～190は胴部の破片である。187・188は隆帯で胴部文様が施文される。189・190は沈線で文様が施文される。

191・192は口縁部が無文となる器形の深鉢形土器である。191は頸部に沈線が施文され、上下交互に円形刺突文が施文される。192は沈線を頸部に巡らせられ、胴部に懸垂文が施文される。

第169図193～204は地文のみが施文される



第171图 第34号住居跡出土遺物(10)



第172図 第34号住居跡出土遺物(11)

深鉢形土器の胴部である。193・196は撚糸文R、194・195は撚糸文Lが施文される。197・198は単節LRの縄文が、199は無節Lの縄文が、200は0段多条の縄文が、201～204は単節RLの縄文が施文される。

205～213は深鉢形土器の底部である。207の底面には敷物の痕跡が残存している。

214～235は浅鉢形土器である。214～221は屈曲する肩部に文様が施文されている。隆帯で渦巻文などの文様が施文されるが、216は隆帯で三角形状区画された内側に沈線で円文が施文される。222～235に文様帯はなく、無文である。222～228は口縁部と胴部とを沈線や段差をつけて区画されている。228は内面に、途中まで穿孔した痕跡が残されている。浅鉢形土器の多くに、赤彩の痕跡が残っていた。217・222・233は内面、219・221・228・232・235は外面、220・227は外面に赤彩が残されていた。そのうち219・221・222・228・233・235は内面に多く、232は外面に多く残されていた。特に232は残りが良好であった。赤彩が残っていたものには、器面が黒色化されているものも多かった。浅鉢形土器の多くは内外面に赤彩が施

されていたと考えられる。

236・237は同一個体の有孔罽付土器である。穿孔部分は罽付部分ではなく、器面に穿たれていた。器面には赤彩の痕跡が明確に残されていた。地文は0段多条LRの縄文で、縦方向に施文される。

238はミニチュア土器の破片である。沈線で文様が施文される。

第170図239～241は土製円盤である。土器片を打ち欠いて円形に加工されている。深鉢形土器の胴部の無文部分が使用される。

第171図242～261、第172図262～269は出土した石器である。

242・243は石錐である。242は先端が欠損する。243は基部と先端が欠損する。

244～254は打製石斧である。244～247は短冊状、248～250は楕形である。254は磨製石斧に再加工が施されているものである。

255は横長のスクレイパーである。鋭い縁辺部に最小限の剥離調整が施され、刃部とされている。

256～261は敲石である。258は剥片を利用しているもので、縁辺に敲打が見られる。

262～269は磨石である。

第35号住居跡 (第173～179図)

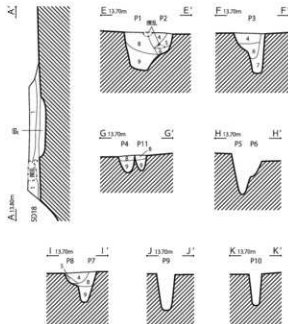
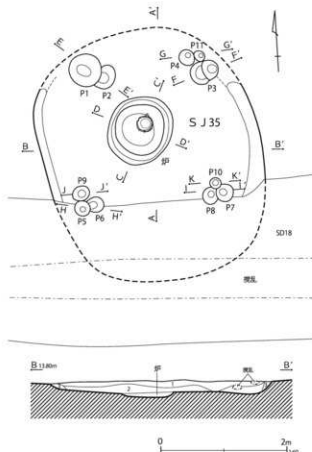
第35号住居跡は、V-16・17グリッドに位置する。近世の溝跡が繰り返り掘削された場所で、住居跡は削平されており、ごく浅い掘り込みが部分的に残っているのみであった。住居跡の南側は近世の第18号溝跡によって壊されている。平面形態は残存部から隅丸方形と考えられる。炉と主柱穴を基準とした主軸方位は、N-5°-Wである。規模は推定される長径4.00m、短径3.54m、深さ0.20mである。

柱穴は11本が検出された。そのうちP2・P3・P6・P8が主柱穴と考えられる。主柱穴は2本以上の柱穴と重複しており、ほぼ同一の主軸方位

で建て替えが行われたと考えられる。

炉は中央北側から検出された。炉の平面形態は楕円形である。炉は埋甕炉である。やや北よりに第176図1の深鉢形土器が炉体土器として埋設されていた。埋没状況や掘り方から、掘り込まれた後、底面を平らに埋めながら整形し、炉体土器を設置したと考えられる。また、炉体土器の周辺からは、こぶし大の礫が数点検出されており、炉体土器を固定するために使用した可能性が考えられる。規模は長径1.66m、短径1.48m、深さ0.41mである。

遺物は覆土が残存する住居跡中央付近から主に出土した (第174図)。復元可能な土器は炉内や

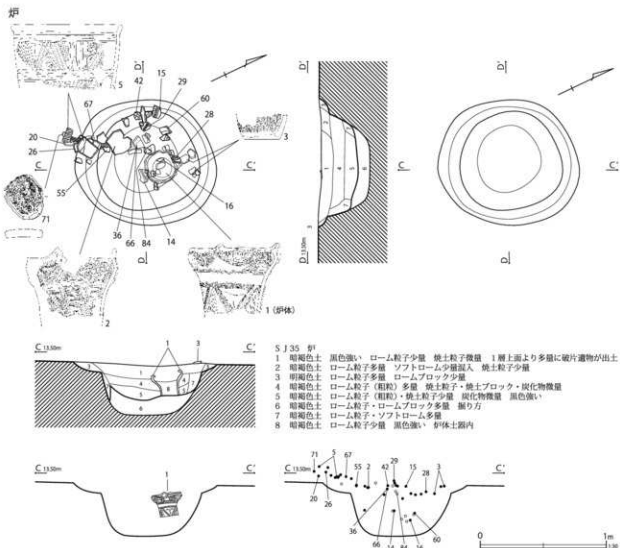


- S J 35
 1 暗褐色土 ローム粒子少量 焼土粒子・炭化物少量 遺物が多量に出土する層
 2 暗褐色土 ローム粒子少量 ロームブロック (1～2cm大) 少量 炭化物微量
 3 暗褐色土 ローム粒子多量 ソフトローム多量に混入
 ビット
 4 暗褐色土 ローム粒子少量 炭化物微量
 5 暗褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック少量 ソフトローム多量に混入
 6 暗褐色土 ローム粒子多量 ソフトローム多量に混入
 7 暗褐色土 ローム粒子多量 ソフトローム多量に混入
 8 暗褐色土 ローム粒子少量 ロームブロック (1cm大) 微量 炭化物微量
 9 暗褐色土 ローム粒子多量 ソフトローム混入

第173図 第35号住居跡 (1)

第29表 第35号住居跡柱穴計測表 (第173図)

番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ
P 1	54.0	66.0	P 2	40.0	34.2	P 3	46.0	61.5	P 4	26.0	27.0	P 5	26.0	63.7
P 6	29.0	34.5	P 7	28.0	50.2	P 8	28.0	20.9	P 9	28.0	57.7	P 10	17.0	48.3
P 11	18.0	24.0												



第174図 第35号住居跡(2)

その周辺から出土した。

住居跡の時期は、炉体土器から中期中葉の勝坂式新段階期と考えられる。

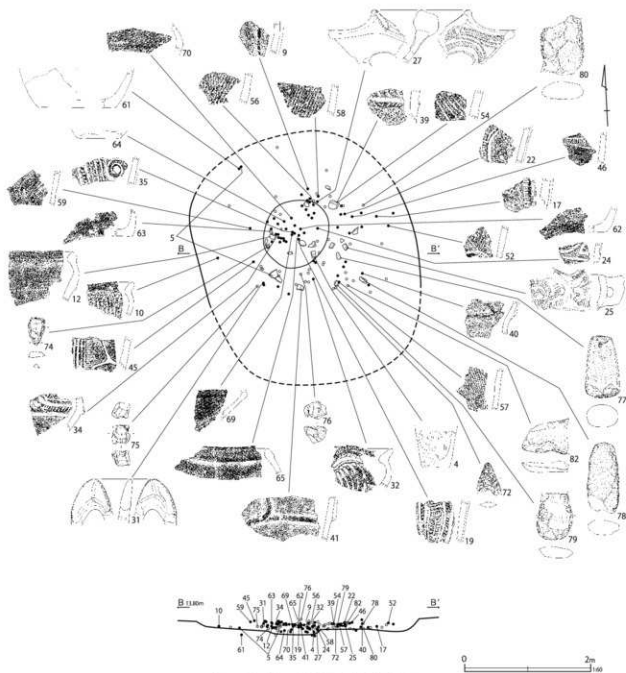
第176図～第179図は出土した遺物である。

第176図1～4は、器形復元が可能であった土器である。

1は炉体土器として埋設されたキャリバー形の深鉢形土器で、口縁から胴部が残存している。文様は隆帯で区画され、その区画内には沈線文や爪形文が施文される。口縁部は4単位の突起が貼付される。突起は1単位不明だが、残り3単位には同じ文様や形状のものはない。口縁部文様帯内は隆帯で三角区画文などが施文され、区画内には短

沈線文などが施文される。隆帯上には刻みが入るが、施文されない部分がある。頸部は無文である。胴部には、隆帯で三角区画文を入れ子状に8単位施文される。逆三角区画文内は、T字状文を3単位施され、1単位は短沈線が施文される。短沈線は左半部に偏って施文される。T字状文の区画内は、区画に沿って刻みが施されている。正三角区画内は左半分に偏って短沈線が施文される区画が1単位で、残り1単位は区画に沿って刻みが施文され、その内側に三角形状の沈線文が施文される。区画文の隆帯上には刻みが施されている。口径23.0 cm、残存高18.2 cmである。

2はキャリバー形の深鉢形土器である。口縁部



第 175 図 第 35 号住居跡遺物出土状況

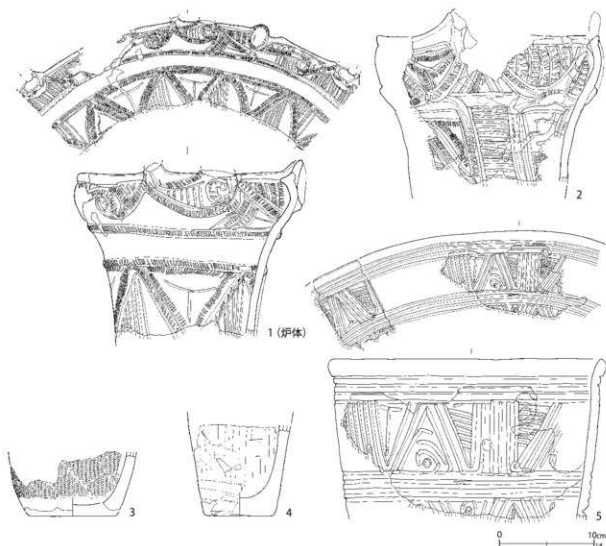
から胴部の破片である。口縁部には波状の突起が貼付される。口縁文様は半円形状の区画が施され、区画内には単沈線文や三叉文などが施文される。頸部は隆帯で区画され、胴部は方形の区画が施される。区画内には沈線文や隆帯で文様が施文される。推定口径は 23.4 cm、残存高 18.1 cm である。

3 は深鉢形土器の胴部の破片である。胴部と底部の剝離痕が割れ口で観察できる。文様は地文の

みで、単節 R L の縄文の条が縦方向になるように斜め方向に施文される。残存高 6.2 cm である。

4 は深鉢形土器の胴部から底部で、器面は無文で、胴部は縦方向に、底部周辺はナデ状に調整が行われている。推定底径 7.2 cm、残存高 9.7 cm である。

5 は深鉢形土器の胴部の破片である。バケツ状の器形で、文様は多段構成だが 2 段が残存してい



第176図 第35号住居跡出土遺物(1)

る。1段目は方形に区画し、その内側を3つに三角形形状に分割されている。三角形内は渦巻文や三叉文、横方向の短沈線が施文される。施文された渦巻文の中央には、円形の深い刺突文が施されている。2段目の文様は一部のためのため不明であるが、三角形形状に区画されたと考えられる。推定口径は28.5cm、残存高16.8cmである。

第177図6～48、第178図49～70は土器の破片資料である。勝坂式期の土器が主体である。

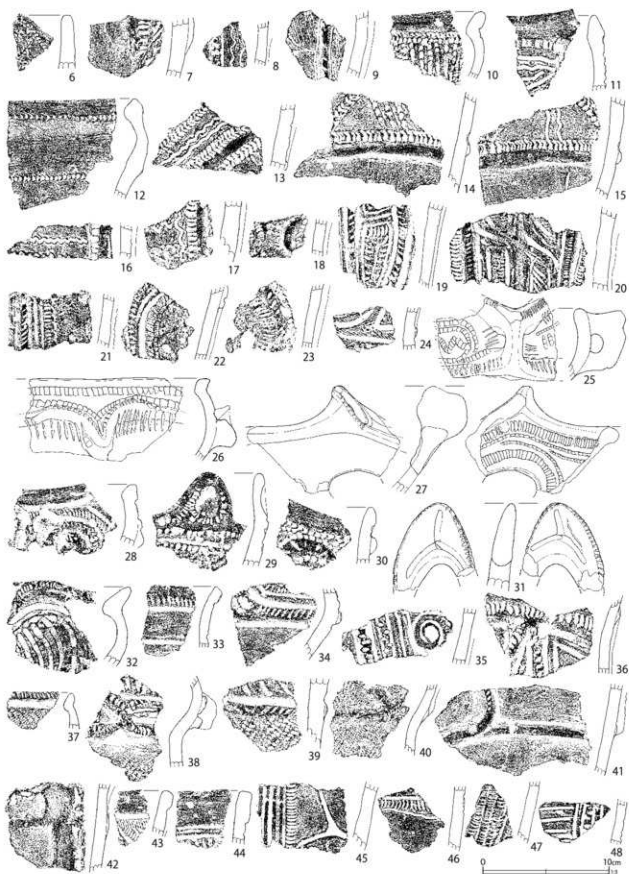
6は古い様相を持つ土器で、口縁部の破片である。押圧文が施文される。

7～9は阿玉台式系の深鉢形土器である。

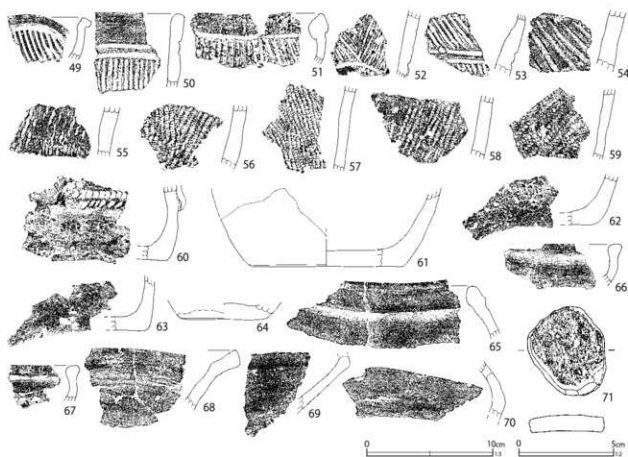
10～18・23・25～27・30は隆帯脇に爪形文

が施文され、それに沿って波状文や角押文が施文される深鉢形土器である。藤内式期の土器である。23・25・26は隆帯上に刻みが施文される。27は把手部分で、内面にキャタピラ状の爪形文とそれに沿ってペン先状の三角押文が施文される。

19～22・24・28・29・31～43は刻みを持つ隆帯脇に沈線文が施文される勝坂式末葉の深鉢形土器である。19～21・28・43は沈線の内側に爪形文や蓮華文が施文されるもので、古い様相を持っている。31は把手部分で刻みを施して縁取りし、内外面に三叉文が施文される。37～40は地文が施文される。いずれも単節RLの縄文である。37はミニチュアに近い小型の土器である。41・



第177图 第35号住居跡出土遺物(2)



第178図 第35号住居跡出土遺物(3)

42は隆帯上の刻みが簡略化されている。

44～48は沈線文のみが施文される深鉢形土器で、勝坂式末葉の土器である。45は半截竹管で沈線が施文され、その内側に爪形文を沿わせている。区画内には三叉文が施文される。

49～54は条線が施文される曽利式の深鉢形土器である。勝坂式末葉と考えられる。

55～59は地文のみが施文される深鉢形土器の胴部である。55は燃糸文R、56・58は0段多条RL、57は0段多条LR、59は単節RLの縄文が施文される。

60～64は深鉢形土器の底部である。

65～70は浅鉢形土器である。文様帯はなく、赤彩の痕跡も認められなかった。

第178図71は土製円盤で、深鉢形器の胴部片を円形に打ち欠いて使用されている。

第179図72～84は出土した石器である。

72は石鏃である。基部は無茎で、逆U字状に大きく挟りが入られている。

73・74は石錐である。73は先端部を欠損する。74は剥片の形状をそのまま利用し、先端部分のみ加工され、広く扁平な部分をつまみ部としている。

75・76は石核である。

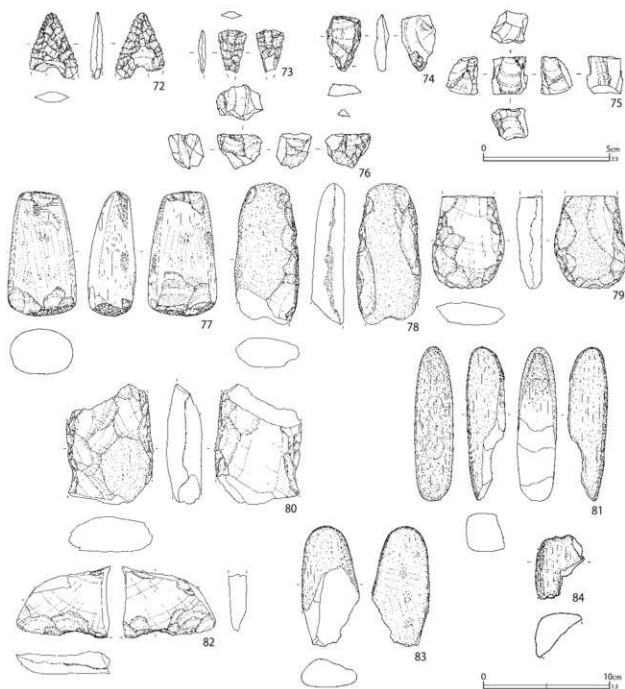
77は磨製石斧としたが、刃部を欠損した定角式の磨製石斧を敲石に転用したものである。刃部に顕著な敲打痕が認められる。

78～80は打製石斧である。78は素材の形状をそのまま利用したもので、剥離は最低限行なわれるのみで、表裏面に大きく自然面が残存している。

81は敲石である。側縁に敲打が加えられている。

82は横長剥片を利用したスクレイパーである。

83・84は磨石である。いずれも破片である。



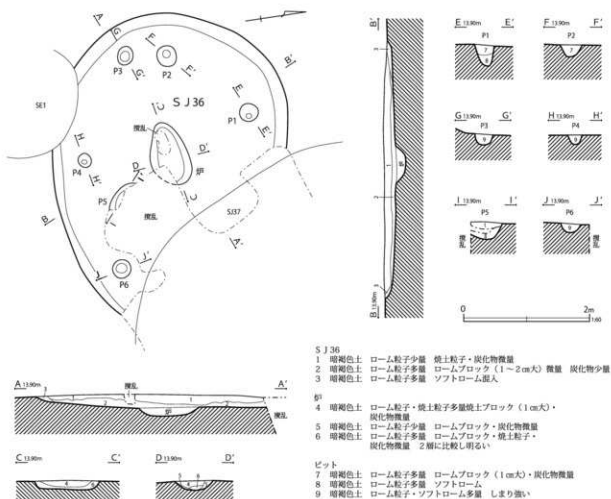
第179図 第35号住居跡出土遺物(4)

第36号住居跡(第180～182図)

第36号住居跡は、X-21・22グリッドに位置する。掘り込みは浅く、後世による削平で失われたと考えられる。第37号住居跡と東側で重複している。両住居跡の重複部分に攪乱が存在していたため、土層断面で新旧関係を判断することはできなかった。出土遺物からは第36号住居跡が

新しい。他には近世の第1号井戸跡によって南壁が壊されている。平面形態は楕円形である。平面形態と炉を基準とした主軸方位は、N-82°-Wである。現存する規模は長径4.70m、短径3.60m、深さ0.18mである。

柱穴は6本が検出された。いずれも浅く規模も小さい。壁際に沿って検出されており、壁柱穴化



第180図 第36号住居跡

第30表 第36号住居跡柱穴計測表（第180図）

番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ
P 1	28.0	34.4	P 2	34.0	20.4	P 3	30.0	18.4	P 4	22.0	16.0	P 5	53.0	29.0
P 6	30.0	18.0												

していると考えられる。

炉はほぼ中央から検出された。地床炉で、平面形態は楕円形である。規模は、長径 1.56 m、短径 0.90 m、深さ 0.14 m である。

遺物分布図に見られるように遺物の出土量は少なかった（第181図）。出土土器も小破片で、器形復元できる土器はなかった。

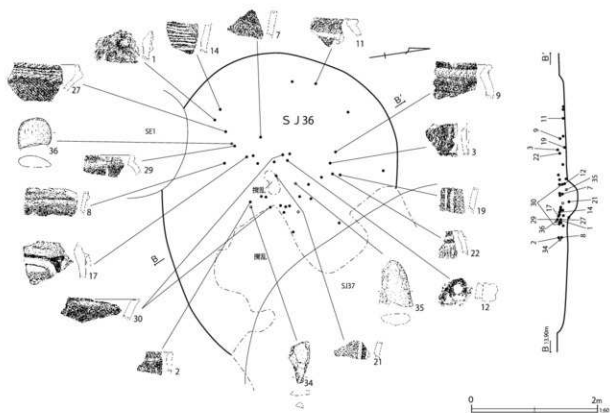
住居跡の詳細な時期は不明であるが、重複する第37号住居跡にはない加曾利EⅢ式期の土器片が出土していることや、柱穴の配列の状況から、

中期末葉である可能性が高い。

第182図1～31は出土土器の破片資料である。

1～8は阿玉台式の深鉢形土器の破片である。2～7は爪形文が施文される。

9～15は勝坂式末葉の深鉢形土器である。9は口縁部で、口唇直下にキャタピラ爪状形文が施文される。10は角押文が縦方向に施文される。11は口縁部で、口縁の端部に刻みが施文される。12は隆帯部にキャタピラ爪状形文が施文される。13は半截竹管で文様が施文される。14は条線が



第 181 図 第 36 号住居跡遺物出土状況

施文される曽利式系の土器である。

16～22は加曽利E式系のキャリパー形の深鉢形土器である。16～21は加曽利EⅢ式期の土器である。16・17は口縁部である。18～21は頸部から胴部の破片で、磨消懸垂文が施文されている。17・19・20は単節RL、18は単節LR、21は複節RLRの縄文が地文として施文されている。

22は地文が条線となる曽利式系の深鉢土器である。キャリパー形の口縁部である。

23～26は地文のみ施文する土器である。23は単節RLの縄文が縦方向に施文される。24～26は楕円状の条線が施文されている。24は流水文状に施文される。

27～31は浅鉢形土器である。いずれからも、赤彩の痕跡は認められなかった。27・28は屈曲する肩部に文様帯を持つものである。27は口縁の端部に刻みが施される。狭い文様帯には横方向に結節沈線文が2列施文され、その下には斜め方

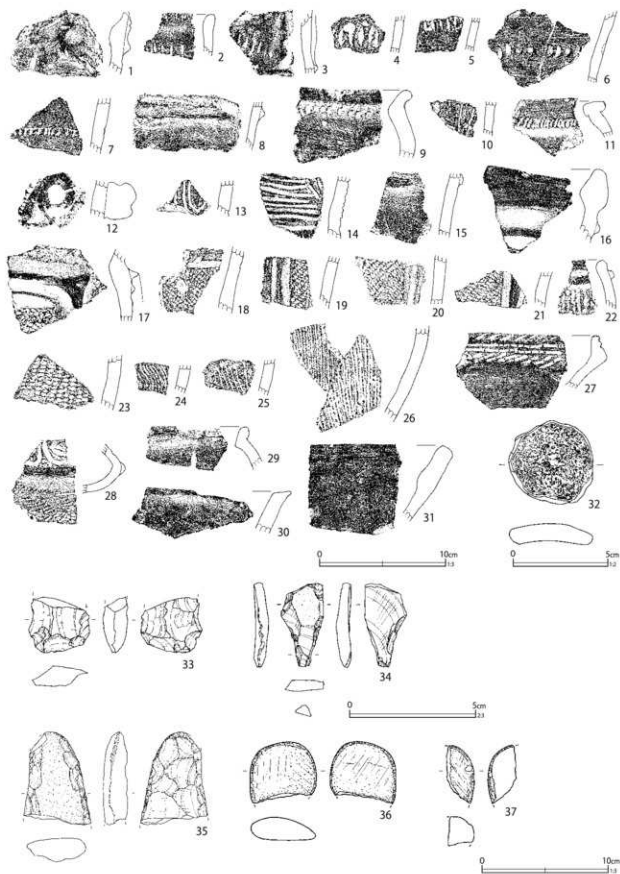
向に結節沈線文が施文される。28は沈線と円形刺突文が文様帯に施文されているが、破片のため全容は不明である。文様帯、胴部には地文が施されている。地文は単節LRの縄文である。29～31は文様帯が施文されない無文の土器である。

第182図32は土製円盤で、深鉢形土器の胴部片の周辺を打ち欠いて、円形に加工されている。器面は無文である。

第182図33～37は出土した石器である。33は石鏃の未製品である。先端が欠損している。34は石錐で、表面には自然面が残存し、裏面には1次剥離面が大きく残されている。

35は打製石斧で刃部に最大幅を持つ楕形と考えられる。刃部は欠損している。表面には大きく自然面が残存している。

36・37は磨石である。36は扁平な楕円形状の礫を素材としたもので、半分が欠損している。器面全面が磨面として使用されている。



第182图 第36号住居跡出土遺物

第37号住居跡（第183・184図）

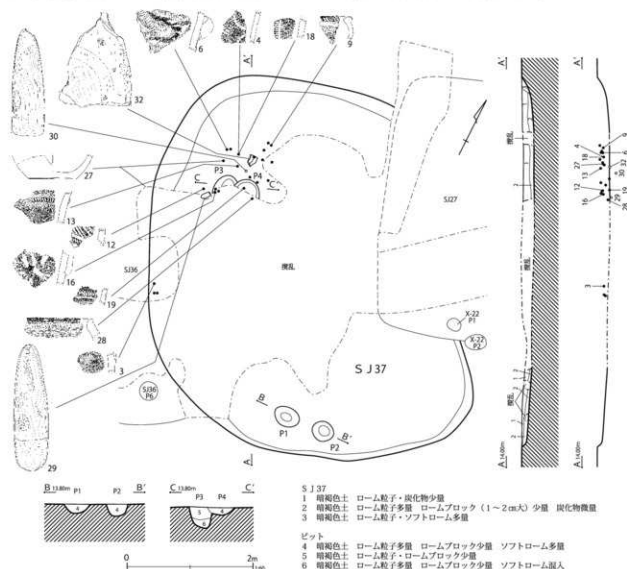
第37号住居跡は、X-21・22グリッドに位置する。中央に大きな攪乱を受けている。西側は第36号住居跡と重複し、新旧関係は不明であるが、出土遺物からは本住居跡が古い。東側は奈良時代の第27号住居跡に壊されている。掘り込みはごく浅く、覆土はほとんど残されていないかった。平面形態は残存部分から隅丸方形と考えられる。平面形を基準とした主軸方位は、N-24°-Wである。規模は長径6.68m、推定される短径4.00

m、深さ0.21mである。

柱穴は4本が検出された。床面のほとんどが壊されているため、柱穴の配置は不明であるが、P3は主柱穴と考えられる。

住居跡中央に広がる攪乱のため炉は検出されなかった。

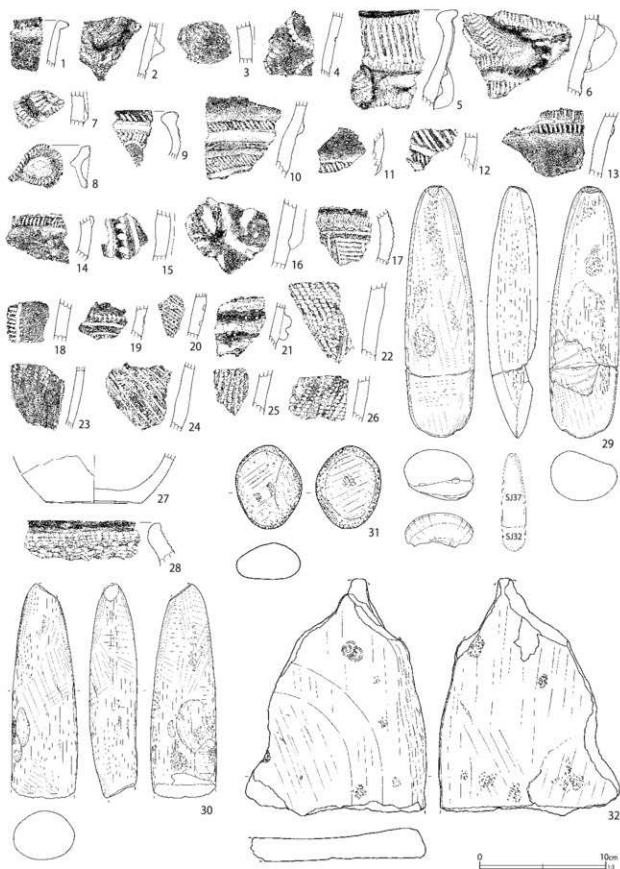
遺物は北西側から少量出土した（第183図）。遺物は勝坂式期の土器が出土しており、住居跡の時期も、中期中葉の勝坂式新段階期と考えられる。第184図は出土した遺物である。



第183図 第37号住居跡・遺物出土状況

第31表 第37号住居跡柱穴計測表（第183図）

番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ
P 1	41.0	17.0	P 2	32.0	20.2	P 3	42.0	30.0	P 4	38.0	9.8			



第184图 第37号住居跡出土遺物

第184図1～28は出土した土器の破片資料である。器形復元が可能なものは出土しなかった。

1～4は阿玉台式の深鉢形土器で、勝坂式との折衷的な土器も含まれる。1は口縁部で、他は胴部である。1は胎土に金雲母を多量に含んでいる。

4は角押文が施文される。

5～20は勝坂式の深鉢形土器である。

5～7は隆帯脇にキャタピラ文状爪形文が施文される。5は口縁部にペン先状の三角押文が施文される。6は隆帯に部分的に刻みが施される。

8～16は隆帯脇に沈線が施文される勝坂式末葉の土器である。

17～19は沈線で文様が施文される土器である。17は爪形文と蓮華文が施文されている。

20は地文上に円形刺突文が施文されている。地文は単節LRの縄文である。

21～23は加曽利E式期のキャリバー形の深鉢形土器である。21は口縁部の破片で、隆帯が施文されている。22・23は胴部で、沈線による懸垂文が施文されている。地文として22は単節LR、23は単節RLの縄文が施文される。

24は曽利式の深鉢形土器である。

25・26は地文のみが施文される深鉢形土器の胴部である。地文は単節RLの縄文が施文される。

27は深鉢形土器の底部である。

28は浅鉢形土器で、屈曲する肩部に3列の結節沈線文が横方向に施文され、その下には3列の波状の結節沈線文が施される。

第184図29～32は出土土器である。

29・30は磨製石斧である。29は乳棒状の大形品である。第32号住居跡から出土した刃部分と接合したものである。裏面側に、破損時の剥離が残されている。接合した第32号住居跡との間は

直線で約6mの距離である。出土遺物の時期は、ほぼ同時期である。30は乳棒状で、基部の先端と刃部を欠損する。

31は磨石である。楕円形の形状で、器面全体が磨面として使用されている。表裏面の中央には、敲打による凹部が残っている。

32は石皿の破片である。表裏面には敲打による痕跡が認められる。また、表面には漏斗状の凹部が残存している。

第38号住居跡（第185図）

第38号住居跡は、V-15・16グリッドに位置する。住居跡のほとんどが第34号住居跡に壊されている。わずかに残された部分も水道管の攪乱や、近世の第20号溝跡によって多くが壊されている。平面形態は明確ではないが、残存する東西の壁から隅丸方形であったと推測される。残された壁を基準とした主軸方位は、N-10°-Eである。残存する規模は長径3.84m、短径0.70m、深さ0.23mである。

柱穴は6本が検出された。床面のごく1部が残存していたため、主柱穴は明らかではないが、P1～P4は掘り込みのしっかりした柱穴であり、主柱穴であったと考えられる。

炉は検出されなかった。

出土遺物もごくわずかであったが、勝坂式終末の第34号住居跡に壊され、中期中葉の勝坂式新段階期と考えられる。

第185図1～14は出土した遺物である。

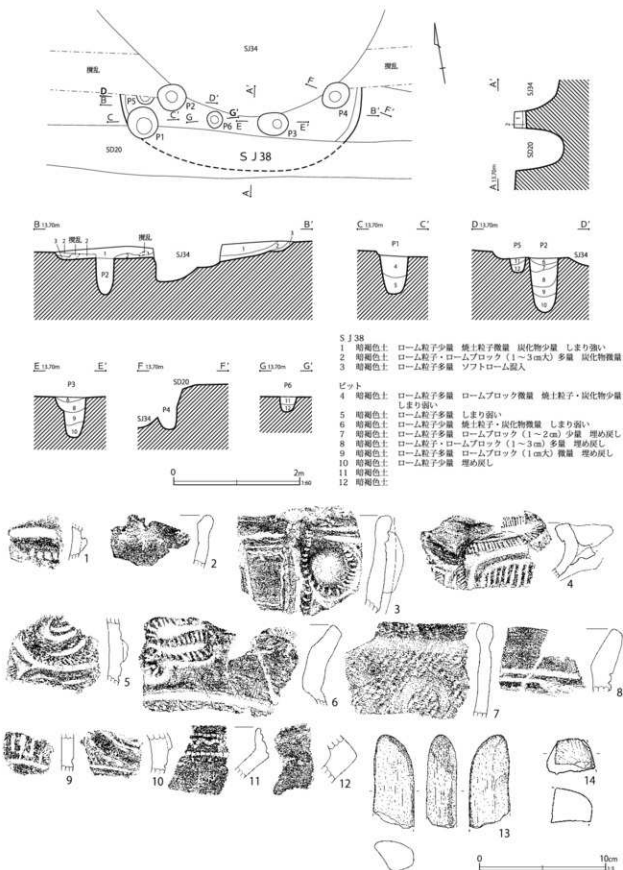
1～12は出土した破片資料の土器である。器形復元が可能な土器は検出されなかった。

1～9は勝坂式期の深鉢形土器である。

1は隆帯脇にキャタピラ状爪形文が施文されるもので、藤内式である。

第32表 第38号住居跡柱穴計測表（第185図）

番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ
P1	51.0	56.4	P2	43.0	85.0	P3	50.6	59.2	P4	41.0	59.9	P5	28.0	20.9
P6	27.0	25.0												



第 185 図 第 38 号住居跡・出土遺物

2～9は刻みが施された隆帯脇に沈線が施されるものが主体となる勝坂式末葉の土器である。2は口縁部の破片で、端部に刻みが施されている。3は口縁に隆帯を貼付され、区画内に沈線による波状文が施文される。4はキャリバー形の口縁部である。隆帯と沈線で施文された区画には、短沈線が施されている。6は無文の口縁部に把手が貼付される。胴部には0段多条R Lの縄文が地文として施文される。7は平坦な口唇部を持つ土器で、胴部には浅い沈線で文様が施文される。0段多条R Lの縄文が地文として施文されている。8は無文の開く口縁で、頸部には半截竹管で沈線が巡らされている。

10は加曽利E式のキャリバー形の深鉢形土器の口縁部である。

11・12は浅鉢形土器である。11は屈曲する狭い肩部に文様が施文される。文様は結節沈線文を横方向に上下2本施文され、その間に波状の結節沈線文が施文されている。

13・14は出土した石器である。13は敲石で、棒状の素材を使用している。下半部は欠損する。のこされた周縁部に敲打痕が顕著異に認められる。14は磨石である。ごく小片が出土した。

第39号住居跡（第186～189図）

第39号住居跡は、V-14グリッドに位置する。西半分は調査区域外にある。北側に第13号住居跡、東側に第40号住居跡が隣接している。壁の一部が近世の第20号溝跡に壊されている。掘り込みは浅く、残存状態は不良であった。残存部から推測される平面形態は隅丸方形である。平面形態と炉を基準とした主軸方位は、N-0°である。推定される規模は長径4.40 m、短径2.06 m、深さ0.15 mである。

柱穴は2本が検出された。主柱穴に相当する

と考えられる。その配置から、主柱穴は4本であった可能性が高い。他に柱穴は検出されておらず、建て替えは行われなかったと考えられる。

炉は中央やや北よりから検出された。炉は埋甕炉である。第188図1の深鉢形土器が埋設されていた。平面形態は円形である。規模は、長径0.56 m、短径0.53 m、深さ0.12 mである。

遺物は覆土が浅いこともあり、少量が出土した（第187図）。主に炉周辺から出土した。時期は炉体土器から、中期後葉の加曽利E I式期であると考えられる。

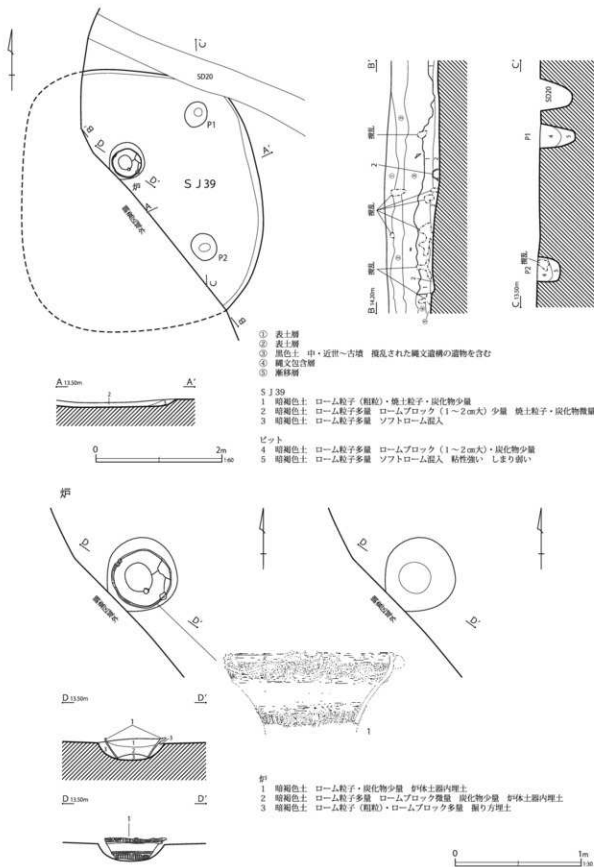
第188図1～3は、器形復元が可能であった土器である。

1は炉体土器として使用されたキャリバー形の深鉢形土器である。口縁部から胴上部が残存している。土器の口縁部は床面より突き出ており、そのためか口唇部が部分的に欠損している。口縁部には把手が貼付された痕跡があるが、故意に打ち割られたかは不明である。口縁部文様帯は隆帯と沈線で、波状文や剣先文などが施文される。隆帯の中央は、沈線によって渦巻文が施文されている。波状文の波頂部の渦巻文は、立体的に張り出たせている。頸部は無文である。胴部とは隆帯を巡らして区画される。胴部は隆帯で文様が施文され、2本1組の垂下する隆帯による懸垂文と1本の蛇行懸垂文が交互に5単位ずつ施されている。地文は捺糸文Lで、口縁、胴部ともに縦方向に施文される。口径44.0 cm、残存高19.4 cmである。

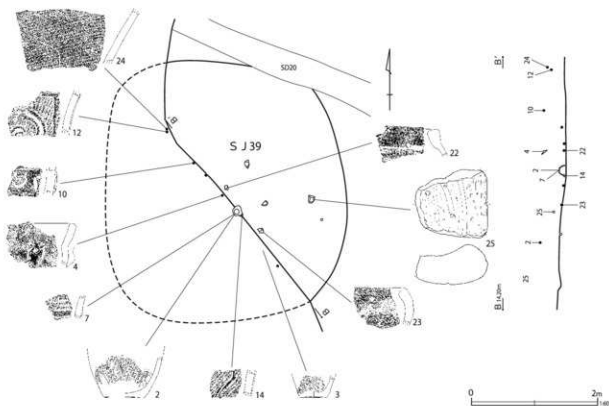
2は深鉢形土器の胴下半から底部が残存していた。沈線によって、2本1組の懸垂文と1本の蛇行懸垂文が交互に施文されたと考えられるが、蛇行懸垂文が抜けているところがある。地文は単節R Lの縄文で、縦方向に施文される。底径8.5 cm、残存高8.8 cmである。

第33表 第39号住居跡柱穴計測表（第186図）

番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ
P1	58.0	56.0	P2	44.0	38.0									



第 186 図 第 39 号住居跡



第 187 図 第 39 号住居跡遺物出土状況

3は深鉢形土器の胴下部から底部が残存している。沈線によって、2本1組の垂下する懸垂文と1本の蛇行懸垂文が交互に施文される。地文は単節R Lの縄文を縦方向に施文される。推定される底径5.8 cm、残存高4.7 cmである。

第189図4～24は、出土した土器の破片資料である。

4・5は阿玉台式系の深鉢形土器である。4は口縁部で、隆帯が貼付されている。

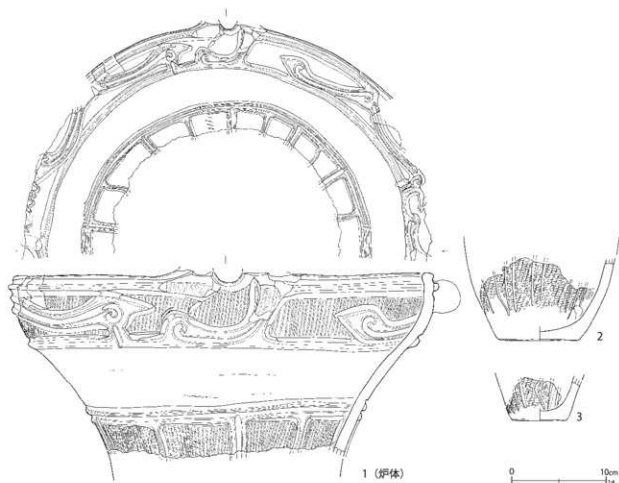
6～9は勝坂式系の深鉢形土器である。隆帯脇に沈線が施文されている。6・7は隆帯上に刻みが施文されるもので、隆帯脇の沈線に沿って爪形文が施文されている。6は文様の中央に三叉文が施文される。8に隆帯は貼付されないが、沈線間に刻みが施される。沈線脇に爪形文や波状文が施文される。9は地文が施文されるもので、隆帯脇の沈線に沿って、爪形文が2列施文される。隆帯上に刻みは施されないが、地文が施文されている。

地文は単節R Lの縄文である。

10～15は加曽利E式系のキャリパー形の深鉢形土器である。10・11は口縁部の破片である。11は繫弧文が施文される。頸部は無文である。12～15は胴部である。12～14は隆帯で懸垂文が施文される。12は2本1組の隆帯で、大形の渦巻文が施文される。14は蛇行懸垂文が施文される。12は0段多条R Lの縄文が、13は燃糸文Lが、14は単節R Lの縄文が地文として施文される。15は沈線で文様が施文される。頸部と胴部を区画する沈線文と蛇行懸垂文の一部が残っている。地文は単節R Lの縄文である。

16～20は地文のみが施文されている深鉢形土器の胴部である。16・17は燃糸文L、18は燃糸文Rが施文されている。19は0段多条L Rの縄文が斜め方向に施文されている。20は単節L Rの縄文が斜め方向に施文される。

21は底部の破片である。胴部には燃糸文Lが



第188図 第39号住居跡出土遺物(1)

地文として施されている。

22～24は浅鉢形土器の破片である。赤彩の痕跡は認められなかった。22・23は口縁部の破片である。22は狭い口縁部を持ち、胴部とは沈線で区画されている。23は口縁部に剥がれた痕跡があり、隆帯で文様が貼付されていたと考えられる。24は胴部の破片である。

第189図25は出土した石皿である。部分的に残存するものであるが、丁寧に加工が施されている。表面は中央にむけてゆるやかにくぼむように加工されている。表裏面ともに使用されており、凹部が残されている。

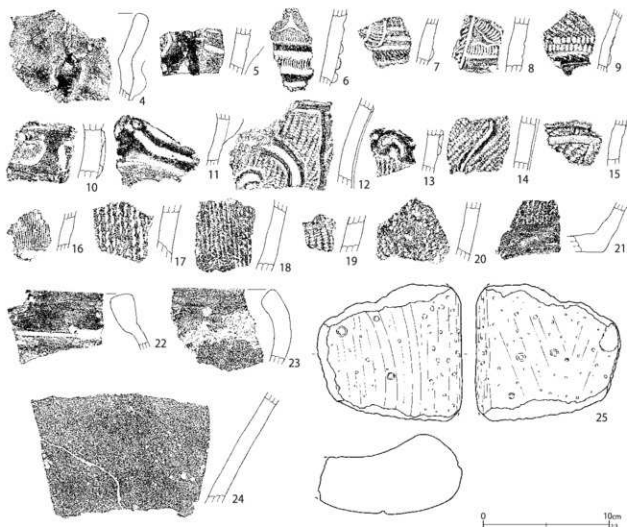
第40号住居跡(第190～192図)

第40号住居跡は、V-14・15グリッドに位置する。西側に第39号住居跡が隣接し、東側は

第33号住居跡と接している。第33号住居跡より本住居跡の時期が新しい。また、住居跡北側は、近世の第18・20号溝跡や水道管の攪乱が東西方向に横断し、壊されている。残存する掘り込みは浅いものであった。平面形態は隅丸方形である。平面形態と炉と主柱穴を基準とした主軸方位は、N-22°-Wである。残存部の規模は長径4.40m、短径4.00m、深さ0.25mである。

柱穴は10本が検出された。そのうちP1・P2・P3・P4が主柱穴と考えられる。複数重複する柱穴もあることから、建て替えが2回以上行われたと考えられる。

炉はほぼ中央から検出された。北半分は第20号溝跡によって壊されていた。炉は地床炉で、火床面は赤く焼土化していた。平面形態は円形で



第189図 第39号住居跡出土遺物(2)

第34表 第40号住居跡柱穴計測表(第190図)

番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ
P 1	31.0	52.5	P 2	32.0	67.9	P 3	24.0	41.5	P 4	37.0	62.0	P 5	23.0	20.8
P 6	34.0	5.9	P 3	31.0	13.8	P 8	31.0	18.5	P 9	30.0	24.4	P 10	22.0	27.5

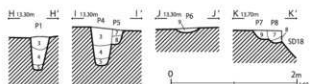
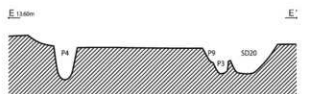
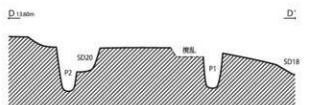
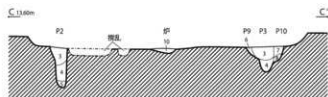
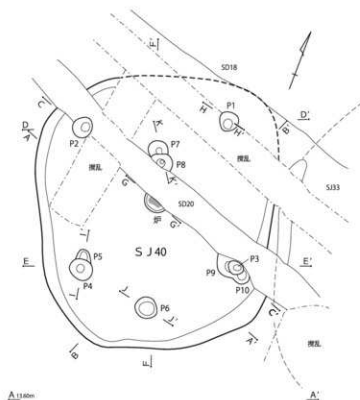
ある。残存している規模は、長径0.58 m、短径0.30 m、深さ0.04 mである。

遺物は主に炉周辺から出土した(第191図)。破片資料で、器形が復元できるものはなかった。

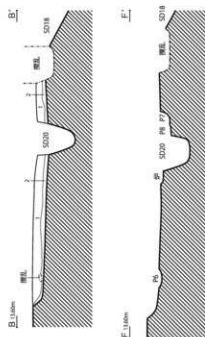
出土土器は、中期後葉の加曾利EⅠ式土器が主体を占めており、住居跡も同時期であると考えられる。

第192図1～19は、出土した破片資料の土器である。

1～6は勝坂式末葉の深鉢形土器である。1は地文が施文されるもので、隆帯上にも地文が施文される。隆帯脇には爪形文が施文される。地文は単節LRの縄文である。2は無文の口縁で、頸部に刻みが施文される隆帯が巡らされている。胴部には沈線で文様が施文される。3は無文の口縁部分である。4は無文の口縁部で、頸部に隆帯で文様が施文される。刻みは部分的に施文される。5・6は円筒状の器形となるもので、5は口縁部であ



0 2m 100

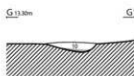


S J 40

- 1 暗褐色土 ローム粒子少量 焼土粒子・炭化物微量 しまり強い
- 2 暗褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック (1~2cm大) 少量 炭化物微量 ソフトローム混入 しまり強い

ビット

- 3 暗褐色土 ローム粒子 (粗粒) 少量 炭化物微量
- 4 暗褐色土 ローム粒子 (粗粒) 多量 しまり弱い
- 5 暗褐色土 ローム粒子・ソフトローム多量 しまり弱い
- 6 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量 ソフトローム混入
- 7 暗褐色土 ローム粒子 (粗粒) 少量 ロームブロック混入
- 8 暗褐色土 ローム粒子多量 ソフトロームブロック状に混入
- 9 暗褐色土 ローム粒子 (粗粒) 少量 ロームブロック・焼土粒子・炭化物微量

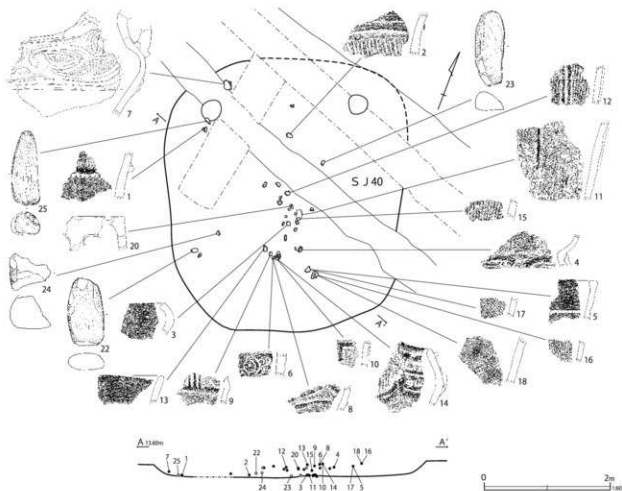


G'

- 10 暗褐色土 焼土ブロック密に多量 焼土粒子多量 灰床面

0 1m 100

第 190 図 第 40 号住居跡



第191図 第40号住居跡遺物出土状況

る。6は文様帯部分で、沈線で文様が施文される。

7～12は加曽利E式系のキャリパー形の深鉢形土器である。7～9は口縁部の破片である。いずれも頭部は無文帯である。7は口縁部に把手が貼付される。隆帯と沈線で渦巻文などが施文される。7の地文は燃糸文Lである。8・9は単節LRの地文が施文される。10～12は胴部である。いずれも隆帯で懸垂文を垂下させている。地文は燃糸文Lが施文される。

13はキャリパー形以外の器形の土器で、外反する無文の口縁部が残存している。

14は地文が条線となる曾利式系の深鉢形土器の口縁部である。器形はキャリパー形である。

15～18は地文のみが施文される深鉢形土器の胴部である。15の地文は燃糸文Lである。16・

17の地文は単節LRの縄文で、18の地文は単節RLの縄文である。

19は浅鉢形土器の底部の破片である。赤彩の痕跡は認められなかった。

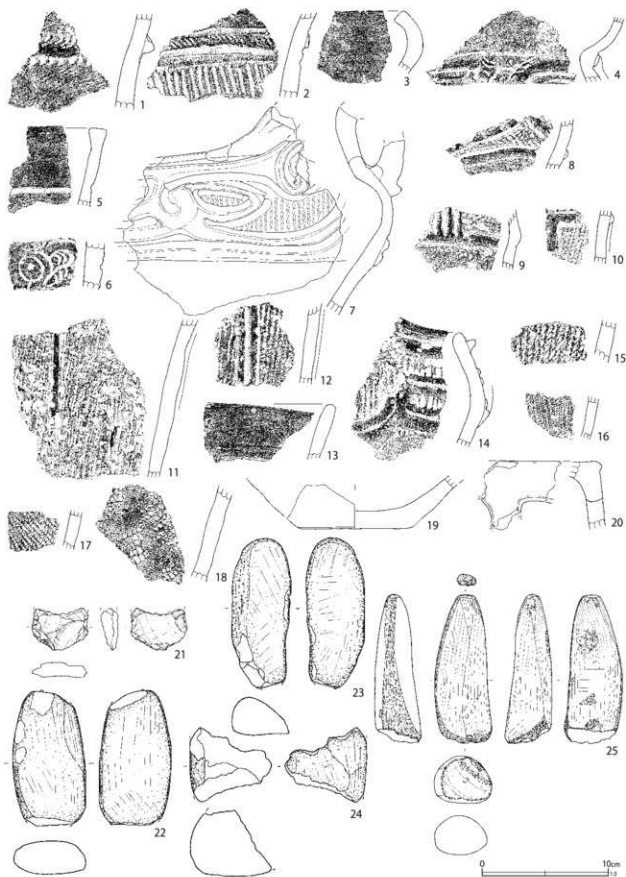
20は器台である。台の上面の一部と、体部のごく一部が出土した。体部には、円孔が2箇所設けられていた。

第192図21～25は出土した石器である。

21は打製石斧で、刃部のみが残存している。調整は粗雑である。

22・23・25は敲石である。22・23は側縁全体に敲打痕が残存している。25は刃部を欠損した磨製石斧を再利用したと考えられる。

24は磨石である。肉厚な破片で、ごく一部のみが残存していた。



第192图 第40号住居跡出土遺物

第41号住居跡（第193～212図）

第41号住居跡は、V-17グリッドに位置する。近世の第18号溝跡に南壁が壊されている。掘り込みの深い住居跡で、確認面から床面までは1m近くあった。1層は厚く堆積していたが、分層できるような土層の変化はなかった。床面の高さは第2ブラックバンドに達しており、検出が困難であった。住居跡の壁は斜めに立ち上がるもので、楯状となっている。住居跡の平面形態は不整形円形である。炉と柱穴を基準とした主軸方位は、N-14°-Wである。規模は長径6.24m、短径5.14m、深さ0.85mである。

柱穴は16本が検出された。主柱穴はP1・P6・P8・P10・P11・P14の6本である。壁面の落ち際に掘り込まれた柱穴である。他にも柱穴が掘り込まれていることから、複数回の建て替えがあったと考えられる。

炉は中央やや北よりから検出された。埋甕炉で、炉の南壁際に炉体土器（第199図10）の浅鉢形土器が設置されていた。炉の平面形態は楕円形である。規模は、長径0.68m、短径0.50m、深さ0.17mである

遺物は多量に出土した。遺物は主に北半分から集中して出土している（第195図）。南半分からの出土量はごく少なかった。遺物は1層中から主體的に出土し、床面直上のものは少なかった。そのため、2層部分まで埋没した後に住居内に廃棄が行なわれたと考えられる。

また、この住居跡の床面直上からは、逆に設置された深鉢形土器（第198図3）と、正位に設置された深鉢形土器（第198図4）が出土した。出土位置から、住居跡の床面直上に設置したと考

えられる。土器に対応する掘り込みなどは確認されなかった。3は底部が欠損し、4は頸部以下が欠損している。欠損の割れ口は平らで、故意に割り取られたと考えられる。住居跡廃絶後に住居内埋葬が行なわれ、それに供えられた土器である可能性が高い。

住居跡の時期は、出土した遺物から中期後葉の加曽利EⅠ式期である。

第198～212図は出土した遺物である。

第198図1～6、第199図7～11は器形復元が可能な土器であった。

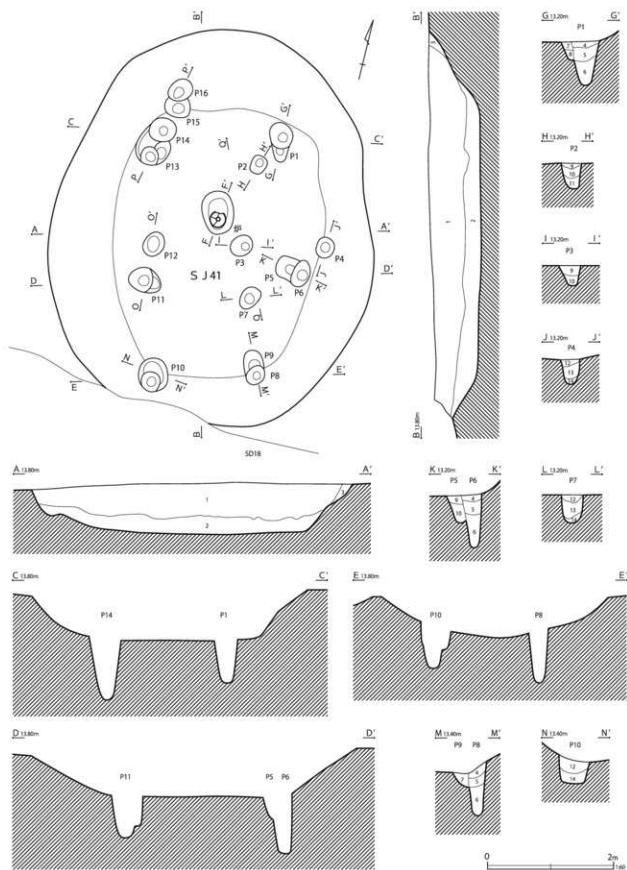
1は深鉢形土器の胴部のみ残存している。器形は、無文のやや開く口縁部を持つと考えられる。胴上部に文様帯を持つ。文様帯は刻みを持つ隆帯によって区画される。区画内は隆帯に沿って沈線が施文され、その内側はペン先状の三角押文などが充填されている。残存高10.9cmである。

2は深鉢形土器の口縁から胴部の破片である。口縁は4単位の波状口縁である。開く口縁から頸部で括れ、そこから胴部に丸みをつけて底部に至る器形である。括れる頸部には隆帯を1本巡らして胴下部と区画されている。地文のみが施文され隆帯上にも残る。地文は単節R.Lの縄文で縦方向に施文されている。推定口径21.6cm、残存高11.9cmである。

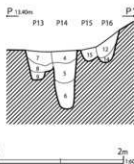
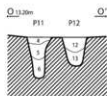
3は、埋設土器2としたキャリパー形の深鉢形土器である。底部は欠損している。口唇下は直立気味の無文部となり、隆帯で口縁部文様帯の上下が区画されている。区画内には端部を渦巻く文様を、2本1組の隆帯で5単位弧状に貼付される。5単位のうち1単位のみ、逆に膨らませて弧文が施文される。渦巻文と胴部区画文とは、短い隆帯

第35表 第41号住居跡柱穴計測表（第193・194図）

番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ
P1	63.0	67.3	P2	30.0	39.5	P3	38.0	30.8	P4	33.0	32.5	P5	34.0	45.0
P6	42.0	86.2	P7	38.0	44.5	P8	33.0	85.8	P9	30.0	24.7	P10	54.0	49.0
P11	52.0	66.5	P12	38.0	45.5	P13	54.0	46.5	P14	43.0	93.0	P15	41.0	25.0
P16	41.0	50.0												



第193图 第41号住居跡(1)



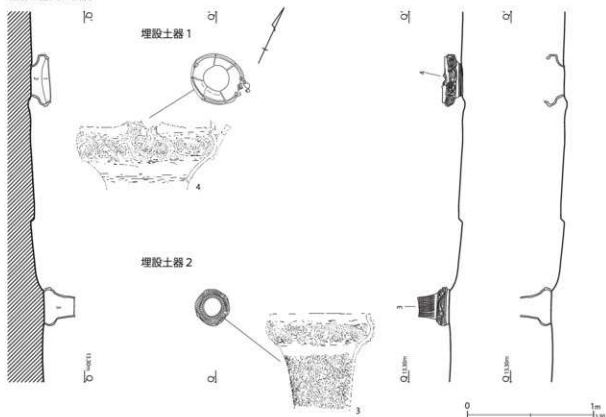
- S J 41
- 1 暗褐色土 ローム粒子 (粗粒)・焼土粒子・炭化物少量 かたくしまる
 - 2 茶褐色土 1層より色調明るい ローム粒子 (粗粒) 多量 焼土粒子・炭化物少量
 - 3 暗褐色土 ロームブロック (1cm大) 微量 かたくしまる
 - 4 暗褐色土 ローム粒子 (粗粒) 多量 焼土粒子・炭化物微量 ソフトローム混入
 - 5 暗褐色土 ローム粒子少量 炭化物微量
 - 6 暗褐色土 ローム粒子多量 焼土粒子微量 炭化物少量
 - 7 暗褐色土 ローム粒子多量 ソフトローム混入
 - 8 暗褐色土 ローム粒子少量 焼土粒子・炭化物微量
 - 9 暗褐色土 ローム粒子多量 炭化物微量
 - 10 暗褐色土 ローム粒子少量 ロームブロック微量 炭化物少量
 - 11 暗褐色土 ローム粒子・ソフトローム多量
 - 12 暗褐色土 ローム粒子 (粗粒) 少量 炭化物微量
 - 13 暗褐色土 ローム粒子 (粗粒) 多量 ロームブロック少量
 - 14 暗褐色土 ローム粒子 (粗粒) 多量 ソフトローム混入
 - 15 暗褐色土 ローム粒子 (粗粒)・炭化物少量

炉



- 炉
- 1 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子・炭化物少量
 - 2 暗褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック少量
 - 3 暗褐色土 ローム粒子少量 焼土粒子微量
 - 4 暗褐色土 ローム粒子多量 焼土粒子多量 焼土ブロック (1cm大) 少量 炭化物多量
 - 5 褐色土 ローム粒子多量 ソフトローム多量
- 埋設土器 1
- 1 暗褐色土 ローム粒子多量 炭化物少量
 - 2 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子少量 焼土ブロック微量 炭化物少量
- 埋設土器 2
- 3 暗褐色土 ローム粒子多量 炭化物微量 しまり強い 粘性強い

埋設土器出土状況



第 194 図 第 41 号住居跡 (2)

を2本貼付して連結させている。5単位の渦巻文のうち、1箇所は逆の渦巻きである。また1箇所のみ、口縁部区画文と連結する短い隆帯が貼付される。渦巻文の隆帯中央には、右巻き、左巻きの1箇所ずつの中央に沈線が施文される。地文は燃糸文Lで口縁は斜め横方向、胴部は縦方向に施文される。口径26.3cm、残存高25.2cmである。

4は、埋設土器1としたキャリバー形の深鉢形土器である。口縁部から頸部が残存している。2箇所把手を貼付するがいずれも破損している。故意に破壊したかは不明である。実測図中央の把手は橋状となっている。内面には沈線文が1部残るが全容は不明である。裏側の把手部分は挟れており、形状は不明である。口縁は直立気味に立ち上がる無文部を持ち、そこから張り出すように隆帯を貼付して口縁部文様帯が施文される。文様帯内には、隆帯で横S字状文などが施文される。貼付された文様に同一の文様はなく、すべてに変化がつけられている。頸部は無文である。胴部との区画には、浮き彫り状の効果をつけるように半截竹管で沈線文が施文される。地文は燃糸文Lで口縁部分は横方向に施されている。口径34.8cm、残存高16.3cmである。

5は深鉢形土器で、胴部から底部が残存している。残存する胴部には地文のみが施文される。地文は燃糸文Lで、やや斜め方向に施されている。底径は8.8cm、残存高13.0cmである。

6は深鉢形土器で、胴部から底部が残存している。胴部には地文のみが施文される。地文は単節RLの縄文で、条が縦方向になるよう斜め方向に施文される。底径7.4cm、残存高16.0cmである。

7はキャリバー形の深鉢形土器で、曾利式系の口縁部文様が施文される。口縁部には4単位の突起が貼付される。突起下には円錐状突起を貼付し、突起上には渦巻文が施文される。突起間には深い短沈線によって中央に渦巻文を配する重弧文様が施文される。頸部とは細く深い沈線を1本巡らし

て区画される。頸部は無文帯となる。胴部と頸部とは、深く施される3本沈線を巡らして区画されている。胴部には3本沈線で懸垂文が施文される。残存部から7単位と推測される。胴部には単節RLの縄文が地文として縦方向に施文される。口径28.0cm、残存高23.0cmである。

8はキャリバー形の深鉢形土器である。口縁部から胴部の一部が残存している。頸部は無文帯である。頸部と胴部は隆帯を巡らせて区画されている。胴部は隆帯で懸垂文を垂下させている。地文は単節RLの縄文で、口縁部は横方向、胴部は縦方向に施文される。推定口径34.5cm、残存高14.1cmである。

9は浅鉢形土器の口縁から屈曲する肩部の破片である。口縁部と肩部を沈線で区画されるが、沈線内に連続刺突列が施文される。肩部には沈線で文様が施文される。赤彩の痕跡は認められなかった。推定口径35.0cm、残存高6.0cmである。

10は浅鉢形土器で、底部を欠損する。炉体土器として炉に埋設されていた。器面は風化し、調整痕は僅かに観察できた。推定口径27.4cm、残存高15.0cmである。

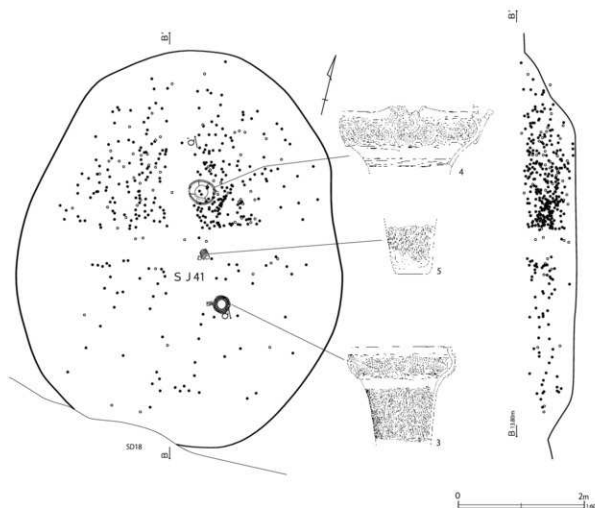
11は浅鉢形土器の無文の底部である。赤彩の痕跡は認められなかった。底径10.8cm、残存高3.7cmである。

第200図12～58、第201図59～94、第202図95～132、第203図133～164、第204図165～200、第205図201～247、第206図248～286、第207図287～314、第208図315～340は出土した破片資料である。

12～137は勝坂式期の土器である。勝坂式末葉の土器が主体を占めている。

12～32は勝坂式系との折衷的な土器も含む阿玉台式系の土器である。12・15・17・22は結節沈線文が施文される。14・25・28～31は爪形文が施文される。

33・34・40・41は古い要素を持つ土器で、新



第195図 第41号住居跡遺物出土状況(1)

道式である。33は口縁部の破片で、角押文が施文される。粘土紐が渦巻状に貼付されている。34・41はペン先状の工具で三角押文が施文される。

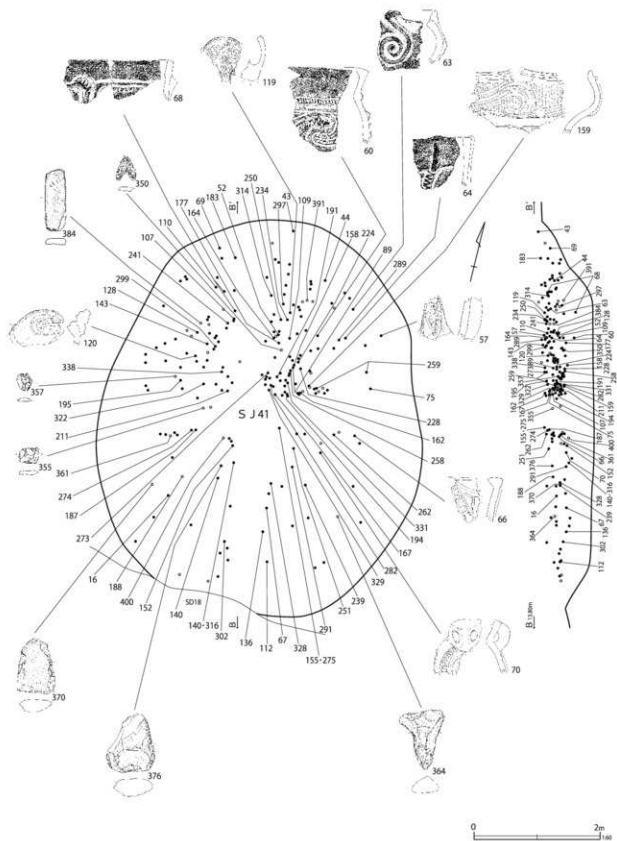
35～39は隆帯脇に角押文や爪形文が施文されるもので、それに沿って波状文が施される。藤内式である。

42～93は隆帯脇に沈線を沿わせる勝坂式末葉の土器である。

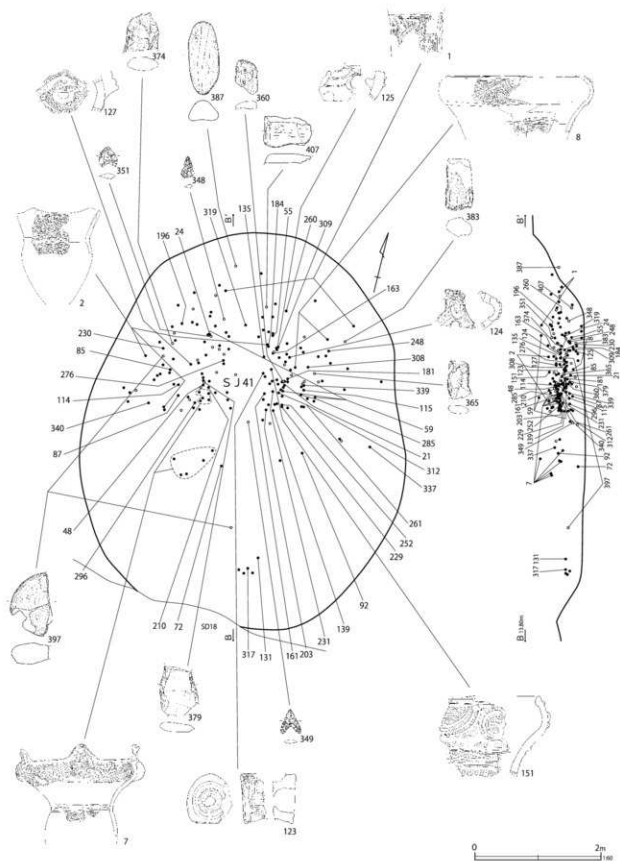
42～49・51～55は隆帯脇の沈線に沿って、爪形文を施文し、それに沿って波状文や蓮華文が施文される土器で、藤内式の要素が残る。隆帯には刻みが施文されている。45・47～49は隆帯脇の沈線が半截竹管で施文される。55は、爪形文内に印刻に近い文様が施文される。

56～58は土器の把手部分である。勝坂式末葉と考えられる。

50・59～93は、隆帯上に刻みを持つ土器で、隆帯脇は沈線で施文され、区画された内側に沈線文が施される。59～69は口縁部である。59・62・63・64・67は無文の口縁部上に、1本隆帯で文様を施文する。59は口唇直下に隆帯が巡らされている。62は突起部分に渦巻文が施文される。63は突起部から渦巻文が垂下されている。66は交互刺突が施される隆帯を垂下させて口縁部が区画され、その内側に三叉文が施文される。70は口縁部に眼鏡状突起が貼付される。71～76は胴部に楕円区画文が施文され、区画内に短沈線が施される。78～81は内湾部に口縁部文様帯が



第 196 图 第 41 号住居跡遺物出土状況 (2)



第197图 第41号住居跡遺物出土状況(3)

施文される。93はペン先状の三角押文が短沈線状に充填されている。

94は灰褐色の色調で、偏平な隆帯で区画された文様内に列点文が充填される土器である。

95～118は隆帯の刻みが刺突文やなくなるものの、沈線のみが施文されるものである。

95～102はペン先状などの結節沈線文が施文されるもので、隆帯は貼付されていない。

103～117は新しい要素を持つ土器で、沈線文間に爪形文などの文様は施文されない。109・118は曽利式の土器と考えられる。

119～125は口縁部の突起部分である。勝坂式末葉・加曾利EⅠ式初頭の深鉢形土器に貼付されていたと考えられる。

126～137は地文が施文されていた土器を一括した。勝坂式末葉の深鉢形土器である。126・127は隆帯上にも地文が施文される。128は口唇部にも地文が施文される土器である。130は古い要素を持つ土器で、口唇直下に押し引き状の結節沈線が施文され、それに小波状文を沿わせている。133は沈線文間に円形刺突列が施文される。126・127・131・134・136は単節RLの縄文が地文として施文され、126・127は隆帯の形状に沿って、132は横方向、134は斜め方向、他は縦方向に施文される。128～130・135は単節LRの縄文が地文として縦方向に施文される。133・137は無節Lが地文として縦方向に施文される。

138～291は中期後葉の加曾利E式期の深鉢形土器である。

138～143は加曾利EⅠ式のキャリパー形以外の器形である。138～142は口縁が開く、朝顔形の器形である。138・139は同一個体と考えられ、口縁直下に刺突が加えられた隆帯が巡らされている。140～142は口唇部を肥厚させており、肥厚部分に沈線が施文される。143はバケツ状の器形である。

144～275は加曾利E式系のキャリパー形の深

鉢形土器である。

144～148については、勝坂式の要素や、中峠式の要素を持つ土器である。

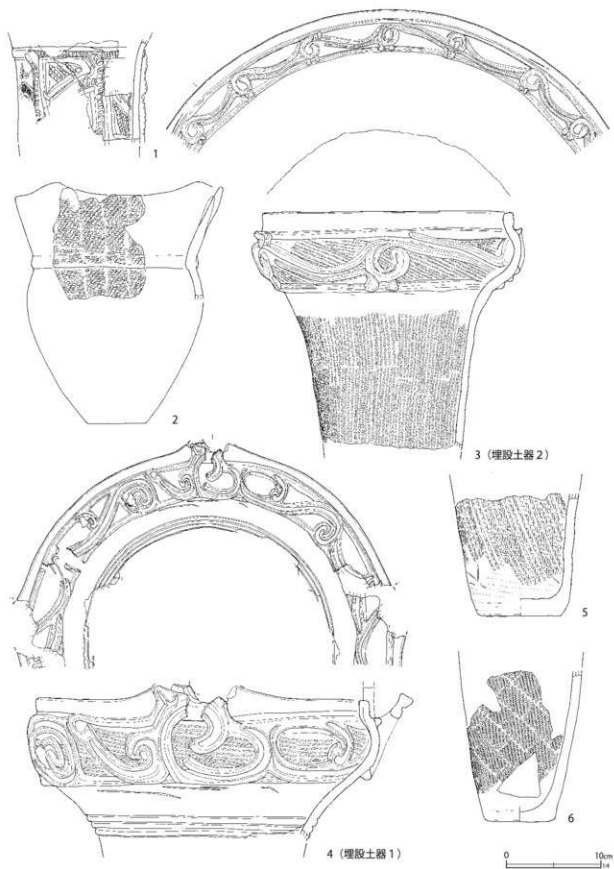
149～178は地文に燃糸文が施文される口縁部の破片である。150～155は口縁部文様帯部分には、地文である燃糸文が横方向に施文されるもので、古い様相を持っている。2本1組の隆帯で横S字状文などが施文される。151は頸部に波状沈線文が多段に施文される。東関東の要素である。156～178は地文である燃糸文が縦方向に施文される。156は口縁に橋状把手が施文される。160～162・164・166・171などは繫弧文状に文様が施文されている。166は文様の先端に剣先文が施文されている。162・169・177は不明であったが、149～164・170～175・178は燃糸文Lで、他は燃糸文Rが地文として施文される。

179～192は地文に単節などの縄文を使用する口縁部の破片である。文様は隆帯と沈線文で横S字状文や、渦巻文などが施文される。179～184は口唇直下に隆帯を巡らし、沈線に沿っている。188は橋状把手部分が剥落した痕跡が残されている。191は頸部に波状沈線文が施文される。地文は179・181～184・186～192は単節RL、180は無節L、185は単節LR、189は0段多条RLの縄文が施文される。181・182・184・186・189・190は口縁部文様内では横方向に施文される。他は縦方向に施文されている。

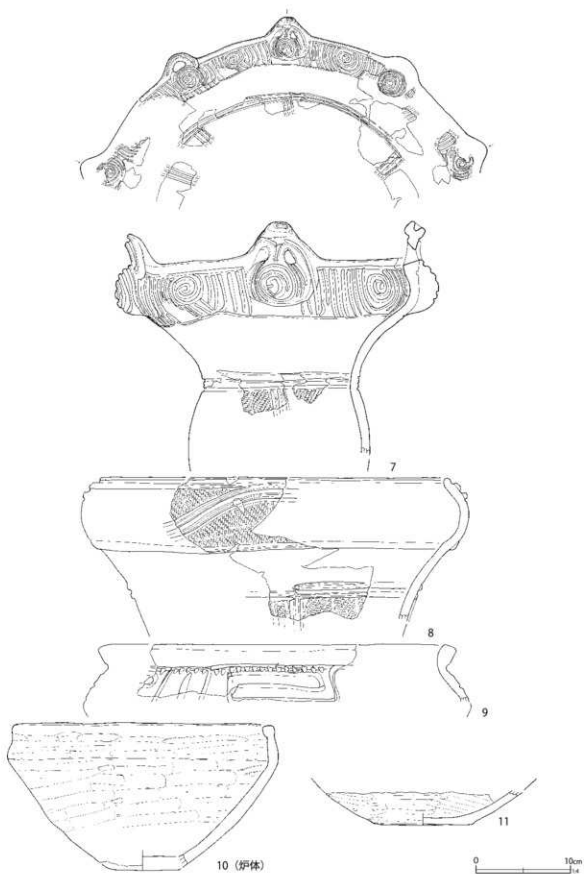
193～195は頸部無文帯が残るもので、193は燃糸文L、194・195は単節RLの縄文が縦方向に施文される。

196は口縁部文様の地文に条線を、胴部は単節RLの縄文が施文される曽利式系と加曾利E式系の折衷的な土器である。

197～227は胴部文様に隆帯が施され、地文に燃糸文が施文される胴部の破片である。197～204は頸部との区画文が残っている。197～200の胴部には地文のみが施文される。201～204は



第198図 第41号住居跡出土遺物(1)



第199图 第41号住居跡出土遺物(2)

隆帯で懸垂文が施文される。205～227は胴部で、隆帯で渦巻文や蛇行懸垂文、垂下する懸垂文が施文される。地文は、198が撚糸文R、198以外はすべて撚糸文Lが施文される。

228～242・261は胴部文様に隆帯が施され、地文に縄文が施文される胴部の破片である。撚糸文地文の胴部と同様の文様が施文される。地文は228・231～241が単節R Lの縄文、229が複節R L Rの縄文、230・242は単節L Rの縄文、261は0段多条R Lの縄文が、縦または斜め方向に施文される。

243～253は胴部文様が沈線で施文され、地文が撚糸文となる胴部である。243は頸部に波状文が施文される。胴部文様は隆帯と同様で、渦巻文や懸垂文が施文される。248は半截竹管で施文される。246が撚糸文Rで、他は撚糸文Lが施文されていた。

254～272は胴部文様が沈線で施文され、地文が縄文となる胴部である。257・260は同一個体である。258・259・263は同一個体である。253・257・260・268は半截竹管によって沈線文様が施文される。257・260が胴部を横方向に多段に分割して文様が施文される以外は、垂下する懸垂文や渦巻文、蛇行懸垂文などが施される。地文として254・255・257・258・260は0段多条R Lの縄文が、256・262・264～266・269～272は単節R Lの縄文が、267は単節L Rの縄文が、縦や斜め方向に施文される。271は横方向に施文されるもので、縄文後期が混入していたと考えられる。

273～275は磨消懸垂文が施文されるもので、他の土器よりも新しい。加曽利EⅢ式期である。273は口縁部、274、275は胴部である。地文として273・275は単節R Lの縄文、274は複節L R Lの縄文が施文される。

276はキャリパー形以外の器形の土器で、バケツ状の器形である。胴部に磨消懸垂文が施文されることから、加曽利EⅢ式期である。

277～281は連弧文系の深鉢形土器である。小破片で、口縁部は検出されなかった。277・280・281の地文は条線、278・279は撚糸文Lが地文として施文される。

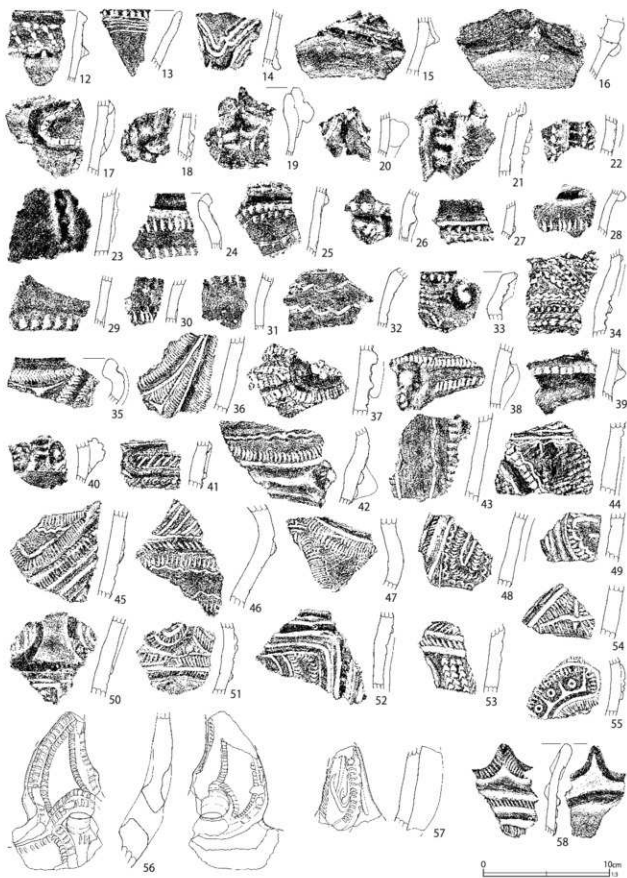
282～292は地文が条線となる曽利式系の深鉢形土器である。282～287は同心円状の文様を口縁部に施文される。286・287は同心円部分が円錐状に貼付されている。289～291はキャリパー形である。292は胴部で、半截竹管による懸垂文を施文している。

293～299は深鉢形土器の胴部の破片である。293～295は撚糸文Lを地文として施文される。296は単節L Rの縄文が縦方向に施文される。297は単節R Lの縄文が斜め方向に施文される。298は0段多条R Lの縄文が斜め方向に施文される。299の地文は条線である。

300～302は胴下半がそろばん玉状となるもので、地文のみが施文される。地文として、300は撚糸文L、301は単節R Lの縄文、302は0段多条R Lの縄文が施文される。

303～314・339深鉢形土器の底部である。303・304は勝坂式末葉で、303は爪形文とそれに沿って蓮華文が施文されている。305・306は隆帯で懸垂文が施文される。307は沈線を横方向に施文して胴部を分割している。地文として、305・307～310は撚糸文L、306・311は単節R Lの縄文が縦方向に施文されている。312・339の胴部は無文であった。314は小片であったが、底面に網代痕が明瞭に残存している。

第208図315～338・340は浅鉢形土器である。315～318・320・321は器面に文様が施文される。315肩部に文様が施文される。口縁は無文で、肩部に隆帯とそれに沿った沈線で文様が施文される。地文は単節R Lの縄文で、縦方向に施文される。316は沈線とその内側に刻みが施される。317・320は隆帯で区画文などが施文される。318は沈線で文様が施文される。321は肩部に単節R Lの



第 200 图 第 41 号住居跡出土遺物 (3)



第201图 第41号住居跡出土遺物(4)



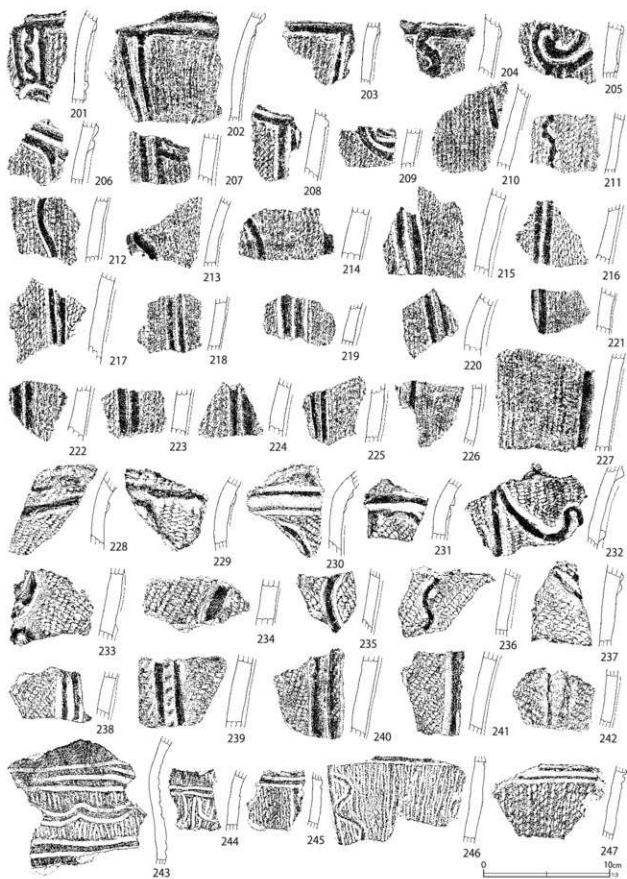
第 202 图 第 41 号住居跡出土遺物 (5)



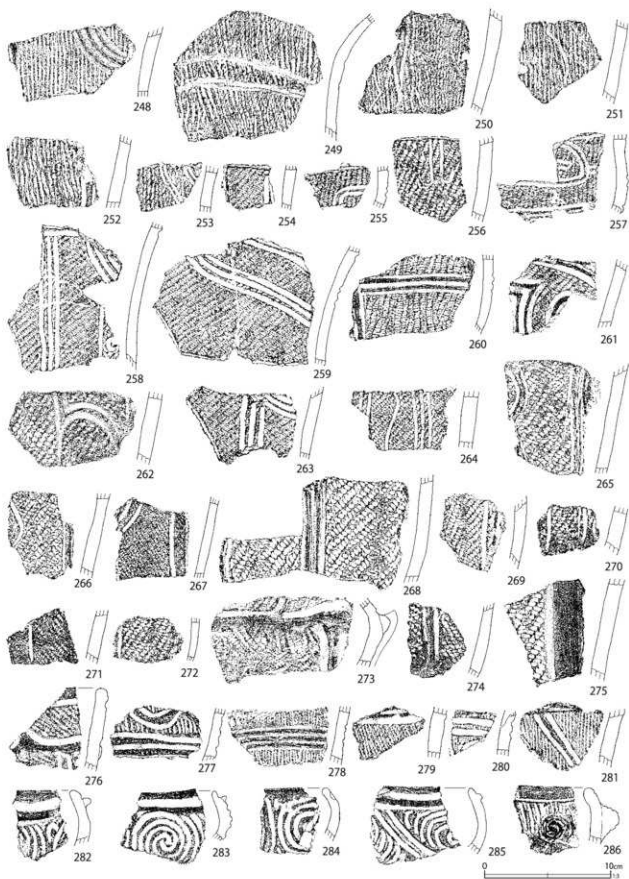
第203图 第41号住居跡出土遺物(6)



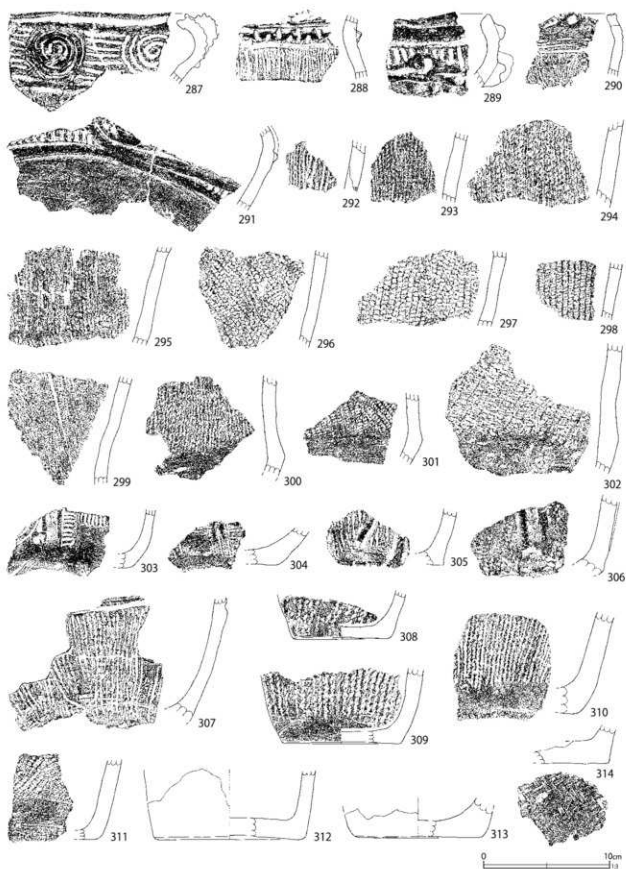
第 204 图 第 41 号住居跡出土遺物 (7)



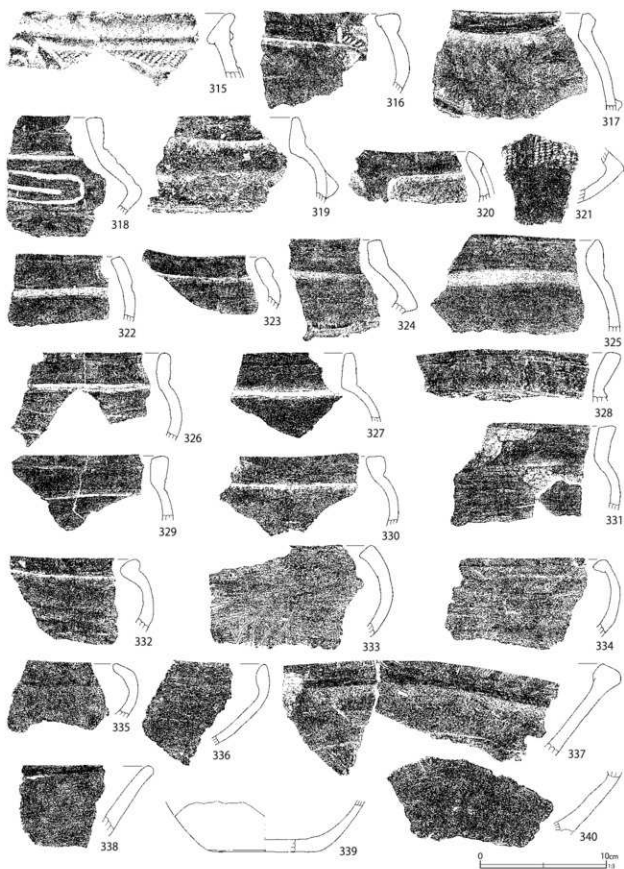
第205图 第41号住居跡出土遺物(8)



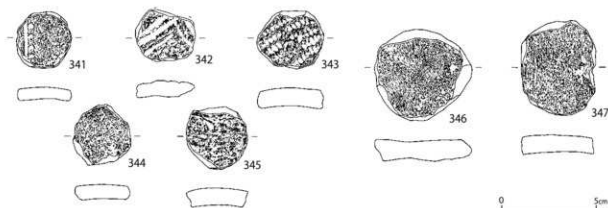
第 206 图 第 41 号住居跡出土遺物 (9)



第207图 第41号住居跡出土遺物(10)



第 208 图 第 41 号住居跡出土遺物 (11)



第209図 第41号住居跡出土遺物(12)

縄文が縦方向に施文される。

322～338・340は文様を持たない土器である。322～332は口縁部と胴部が括れるもので、337以外は括れ部に沈線が施文される。赤彩は、325は内面にわずかに、329は内外面にわずかに、330は内外面に明瞭に、336は内面に明瞭に残存していた。333～338は口縁部と胴部に明瞭な区画がないものである。333～336は口縁部が大きく内湾する器形である。337・338の口縁部は直線的に外反している。339・340は底部の破片である339の内外面には赤彩の痕跡が認められた。340の内面は黒色化している。

第209図341～347は出土した土製円盤である。他の住居跡からは1、2点しか出土しておらず、多量に検出されたと言える。341は勝坂式系、342は連弧文系の深鉢形土器の胴部の破片を利用している。343～345・347は深鉢形土器の胴部の破片である。343は単節RLの縄文が縦方向に施文される。他は無文である。346は底部の破片を利用している。

第210図348～369、第211図370～390、第212図391～407は出土した石器である。石器の中でも磨石や石皿は破片で出土しているが、被熱しているものも多かった。住居跡内からは、焼礫も多量に検出されていることから、それらの石器も焼礫に利用されたと考えられる。

348～351は石鏃である。いずれも無茎である。

348の基部は挟りがなく外湾している。そのことから、石鏃の可能性も考えたが、側縁部が鋸歯状となっていることから石鏃とした。349・350は基部の挟りが逆V字状に深く入る。351は粗雑な作りで、裏面に大きく1次剥離面が残る。基部には浅い挟りが入る。

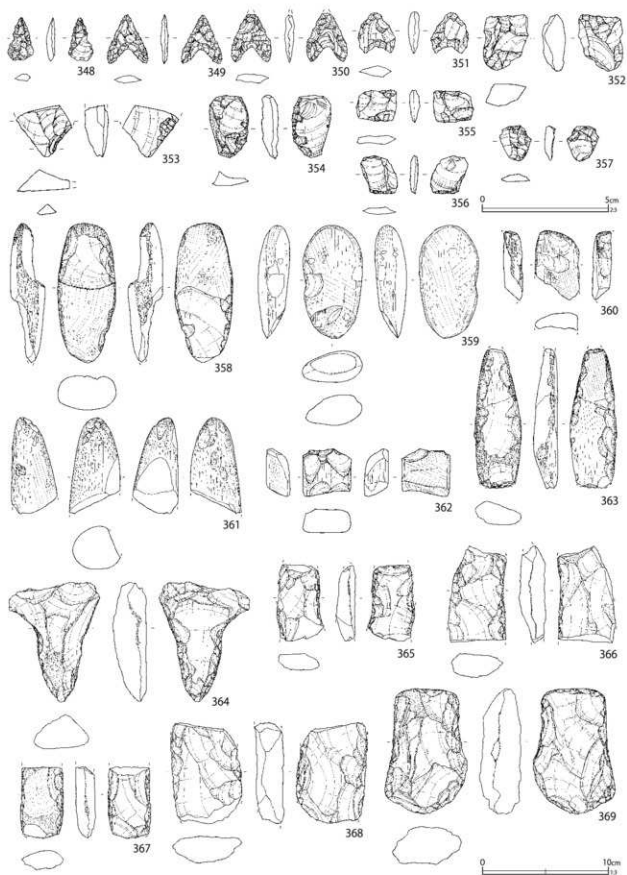
352・355～357はくさび形石器である。上下方向から剥離調整がなされている。

353は石鏃である。剥片の縁辺を部分的に調整してするのみである。

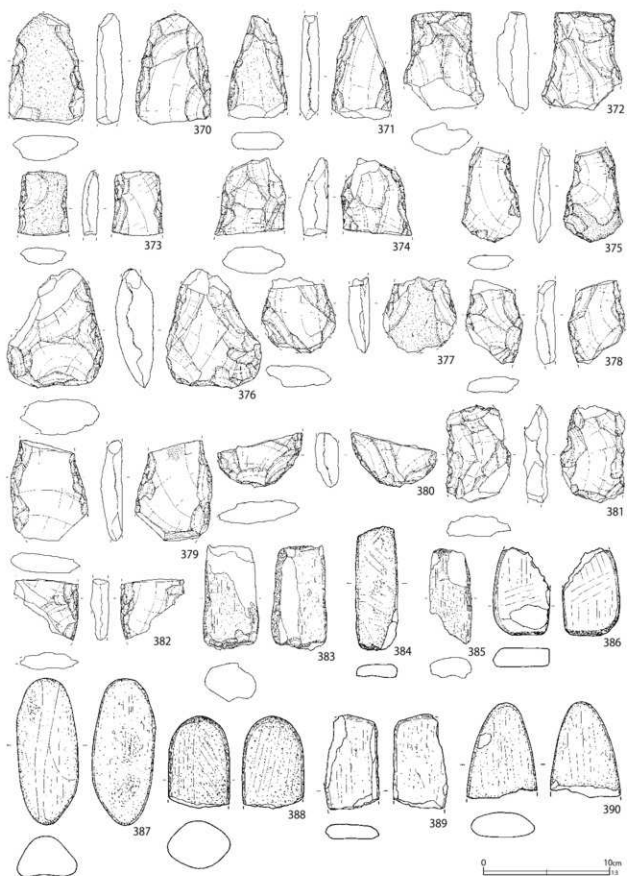
354は使用痕を有する剥片で、縦長剥片の縁辺に調整が認められる。

358～363は磨製石斧である。完形のものとは359以外ではなく、敲石として再利用されたと考えられるものもあったが、ここでは磨製石斧として分類した。358は側縁部に敲打痕が認められるもので、敲石として再利用したと考えられる。359は定型的な磨製石斧ではないが、器面を磨いて加工し、刃部も作り出している。360は敲石に再利用された可能性がある小破片である。361は乳棒状の磨製石斧の基部部分である。362は定角式の磨製石斧の一部と考えられるが、破損後に剥離が加えられている。363は敲打痕や側縁からの剥離が加えられており、破損後に打製石斧に再利用されたと考えられる。

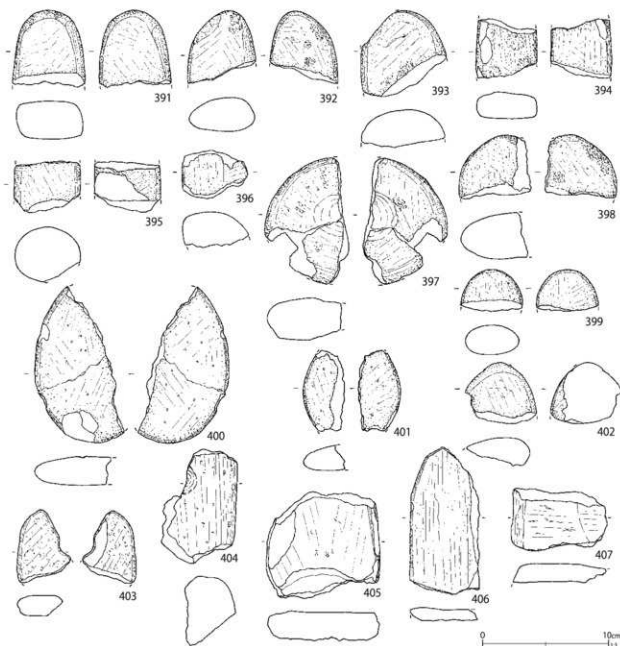
364～382は打製石斧である。364は逆三角形の器形であるが、打製石斧として分類した。



第 210 图 第 41 号住居跡出土遺物 (13)



第211图 第41号住居跡出土遺物(14)



第 212 図 第 41 号住居跡出土遺物 (15)

365～368 は短冊形の打製石斧である。367 の刃部周辺には擦痕が認められる。369～381 は刃部に最大幅を持つ楕形の打製石斧である。完形のもののは 369 のみで、側縁は浅い抉りが入り刃部は丸刃である。370・371・373 は表面に大きく自然面が残存している。382 は小破片である。

383～385 は敲石である。縦長の素材を使用しており、側縁には敲打痕が顕著に見られる。

386 は砥石である。方形で偏平な素材を使用し

ている。

387～403 は磨石である。387 は完形で、他はすべて破損品であった。表面や側縁部に敲打痕が残るものが多くを占めている。被熱のために赤化しているものも多く観察された。397 は表裏面の中央に凹部が認められる。

404～407 は石皿の破片である。404 には漏斗状の凹部が認められる。406・407 は表面の剥落部分である。

第 42 号住居跡 (第 213 ～ 216 図)

第 42 号住居跡は、U-17 グリッドから検出された。第 31 号住居跡を壊している。覆土と考えられる暗褐色土が小範囲に残存している。その範囲内からは埋甕が 2 基検出された。埋甕として使用された土器は中期末葉の深鉢形土器で、周辺からも同時期の土器片が少量検出されたことから、調査時に住居跡に伴う埋甕としたものである。埋甕に埋設されていた土器は、遺構確認時すでに露出して検出された。

住居跡の平面形態は不明で、その規模も不明である。

柱穴は想定範囲内から、2 本が検出された。P 1 の規模は長径 0.36 m、深さ 0.24 m、P 2 の規模は長径 0.30 m、深さ 0.12 m である。

炉は検出されなかった。

埋甕は 2 基が検出された。精査した結果、埋甕 1 に使用された第 214 図 2 の深鉢形土器は、中期終末の加曾利 E IV 式、埋甕 2 に使用された深鉢形土器は、中期末葉の加曾利 E III 式新段階の土器であることがわかった。当初は住居跡に伴うと考えていたが、2 基の埋甕に時期差があることや、単独の第 3 号埋甕が、重複する第 31 号住居跡の北側から検出されていることから、埋甕 1・2 は単独の埋甕であった可能性が高い。

埋甕 1 の土器は、正位に埋設されていた。規模は、長径 0.42 m、短径 0.41 m、深さ 0.16 m である。

埋甕 2 は、底部を中心に埋設し、その周りに打ち欠かれた土器片を埋設していた。規模は、長径 0.32 m、短径 0.31 m、深さ 0.15 m である。

住居跡の時期は、埋甕よりも古いと考えられる。少量であるが、出土した土器から中期末葉の加曾利 E III 式期と考えられる。

第 214 図 1 は埋甕 2 に埋設されていたキャリパー形の深鉢形土器である。口縁から底部が復元された。口縁の半分程度が欠損するが、削平のため失われたと考えられる。口縁の内湾は緩く、胴

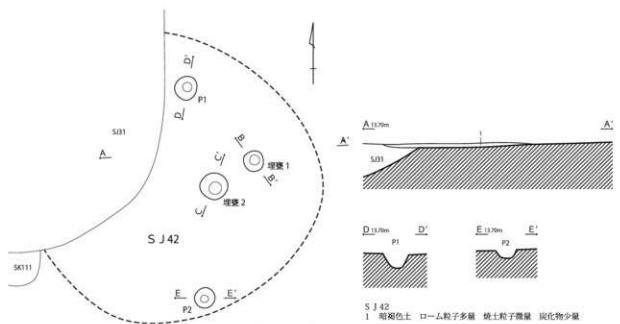
部の括れも浅くなり、器形が崩れていることがわかる。上部に比べ、底部が小さく作られている。口縁部は平縁で、口唇部下に幅広の沈線が巡らされている。口縁部文様はその沈線に繋がるように、隆帯が弧状に施文されている。隆帯には幅広の沈線が沿わされている。弧文間には渦巻文を配置していたと考えられるが、欠損しているため不明である。口縁部と胴部に明確な区画文は施されていない。胴部には、2 本 1 組の沈線によって磨消懸垂文が 11 単位施文され、多条化している。地文は単節 L R の縄文で、口縁部は横方向に、胴部は縦方向に施文される。口径 43.5 cm、底径 8.0 cm、器高 57.6 cm である。

2 は、いわゆる吉井城山類と呼ばれる深鉢形土器で、口縁部は 4 単位の小波状口縁である。口唇部下には、口縁部の形状に沿って沈線が施文され、狭い無文の口縁部を 4 分割させている。胴部の括れ部分で、文様は上下に分かれている。胴上部には 11 単位の波状文、胴下部には 9 単位の逆 U 字状文が施文され、文様内に地文が充填されている。波状や逆 U 字文の先端は、V 字状に近い形状になっている。地文は単節 L R の縄文で口縁直下は 1 段横方向に施文され、他は縦方向に施される。口径 26.0 cm、底径 7.3 cm、器高 37.8 cm である。

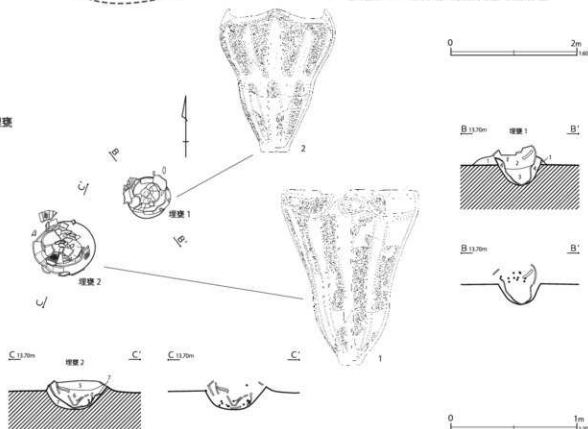
第 215 図 3 ～ 7 は、出土した土器の破片資料である。

3 ～ 6 は深鉢形土器である。

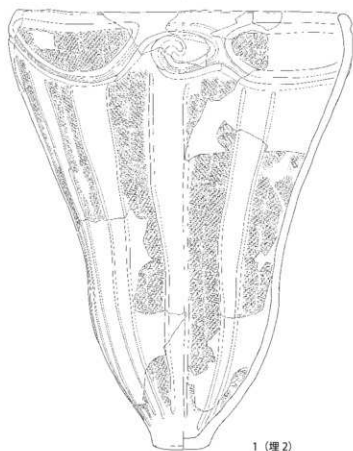
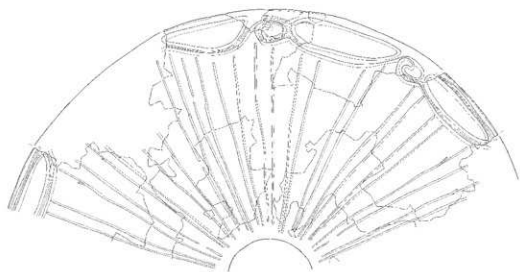
3 ～ 5 は口縁部の破片であるが、口縁部文様帯を持つ土器はなかった。3 は口縁から胴部の破片である。口縁は沈線を 1 本巡らしており、狭い無文が作り出されている。2 と同様に、吉井城山類型の土器で、胴上部に逆 U 字状に近い縦長の波状文が施文されている。地文は無節 L の縄文で、縦方向に施文される。4・5 は口縁部で、沈線を巡らして無文の口縁部が作り出されている。口縁区画の沈線直下には、地文として単節 R L の縄文が横方向に施文されている。



埋溝



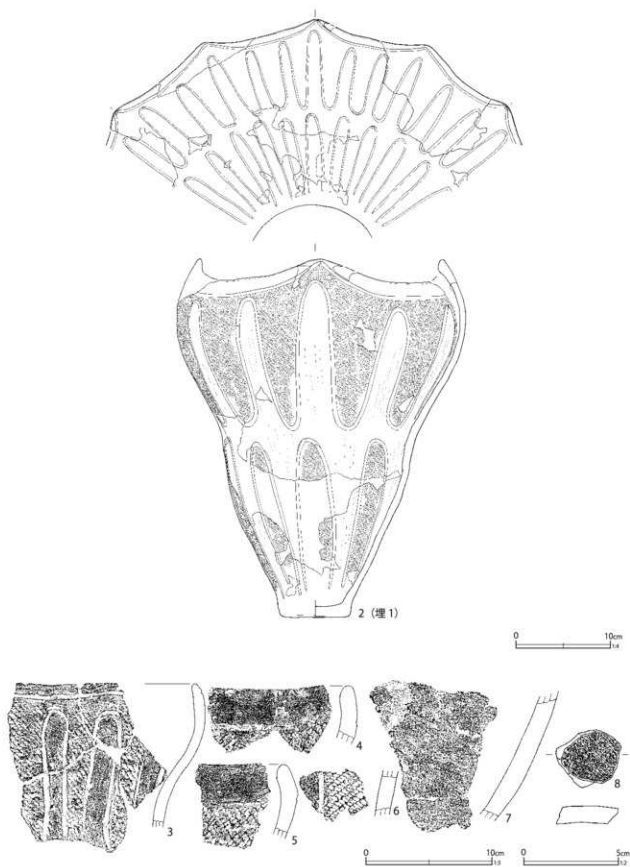
第 213 図 第 42 号住居跡



1 (埋2)



第214図 第42号住居跡出土遺物(1)



第 215 図 第 42 号住居跡出土遺物 (2)

6は胴部で、沈線で磨消懸垂文が施文されている。地文は単節RLの縄文で、縦方向に施文されている。

7は浅鉢形土器の胴部の破片である。無文で、赤彩の痕跡は認められなかった。

8は土製円盤である。深鉢形土器の胴部片を使用して、打ち欠いて円形に加工している。

第216図9～12は出土した石器である。

9は石核である。左右の側面には風化面が残っている。

10はスクレイパーである。横長の薄い素材を使用しており、刃部分のみ細かい調整剥離が行われている。

11は磨石である。半分が欠損している。表裏面と側縁には敲打痕が認められる。器面全体を磨面として使用している。

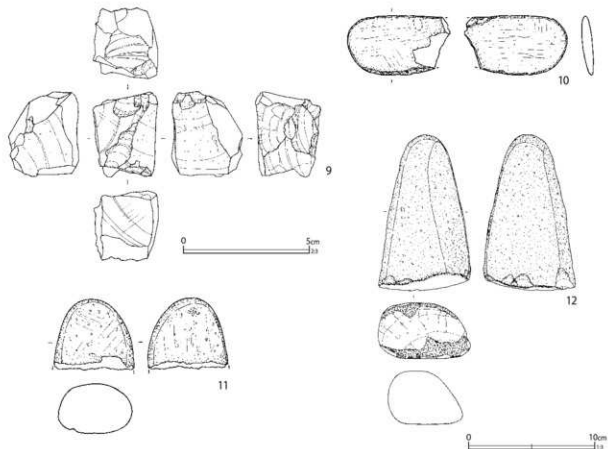
12はスタンプ形石器である。完形で、基部先端が窄まるもので、下端面には縁辺を中心に敲打痕が認められる。敲打のため、下端部には剥離が残されている。住居跡には伴わない石器であると考えられる。

第43号住居跡（第217～222図）

第43号住居跡は、X・Y-21グリッドに位置し、住居跡の重複が著しい箇所から検出された（第217図）。北半部が第53号住居跡と重複し、南半部は第54・55号住居跡と重複していた。第217図の土層断面から、第54・55号住居跡に壊されている。第53号住居跡との新旧関係は不明である。

平面形態は方形に近い。平面形態を基準とした主軸方位は、N-15°-Eである。規模は長径6.50m、短径6.30m、深さ0.25mである。

柱穴は9本が検出された。主柱穴はP1・P3・



第216図 第42号住居跡出土遺物（3）

P4・P5の4本と考えられる。他の住居跡の柱穴とも重複しているため、建て替えなどは不明である。

炉は検出されなかった。

遺物は住居跡の北東側から出土した(第219図)。床面から浮いた状態で、敷かれたように出土した。第220図1はそこから出土した加曽利EⅢ式土器である。本住居跡は土層では勝坂終末期の第54・55号住居跡よりも古い。第53号住居跡も加曽利EⅢ式期である。そのため、出土している土器のほとんどが第53号住居跡に帰属すると考えられる。第219図の土器集中については、出土状況から、土壌の底に敷かれた土器敷部分である可能性が高い。

住居跡の時期は明確ではないが、中期中葉の勝坂式期と考えられる。

第220～222図は出土した遺物である。

第220図1～3は、器形復元が可能であった深鉢形土器である。1は土器敷部分から検出された土器である。2・3は、第53号住居跡に伴う土器と考えられる。加曽利EⅢ式である。

1はキャリバー形で、大形の土器である。口縁から胴部が残存している。口縁は4単位の緩やかな波状口縁で、波頂部下には渦巻文が施文される。逆向きの渦巻文は裏面に位置している。口縁部の文様区の単位は不明である。口縁と胴部は沈線を経らして区画される。胴部には、3本1組の沈線で懸垂文が垂下される。地文は複節LRLの縄文で、口縁は横方向に、胴部は縦方向に施文されている。推定口径60.5cm、残存高31.6cmである。

2は、胴下半から底部が残存している。胴部には2本1組の沈線で、磨消懸垂文が垂下している。地文は複節LRLの縄文が、縦方向に施文される。底径7.6cm、残存高11.5cmである。

3は胴部から底部の破片で、胴部の一部が残存している。胴部には沈線による懸垂文が施文される。地文は撚糸文Lである。底径は7.2cm、残

存高5.3cmである。

第221図4～55は出土した土器の破片資料である。

4～14は勝坂式末葉の土器である。隆帯とそれに沿って沈線が施される。

4・5は古い要素が残存する土器で、沈線に沿って、爪形文が施文され、爪形文には蓮華文を沿わせている。

6～9は隆帯に刻みが施文されるもので、6・7は口縁部片である。10は半截竹管で方向に区画された内側を単沈線で充填されている。

11は沈線のみが施文される。

12は地文が施文される土器である。地文は単節LRLの縄文である。

15は朝顔形の口縁の肥厚部分である。

16～28は加曽利E式系のキャリバー形の深鉢形土器である。

16～18は口縁部である。16は隆帯で渦巻文が施文される。地文は撚糸文Lである。17は隆帯に沿って幅広の沈線が施される。

19は頸部の破片である。無文の頸部が残存している。

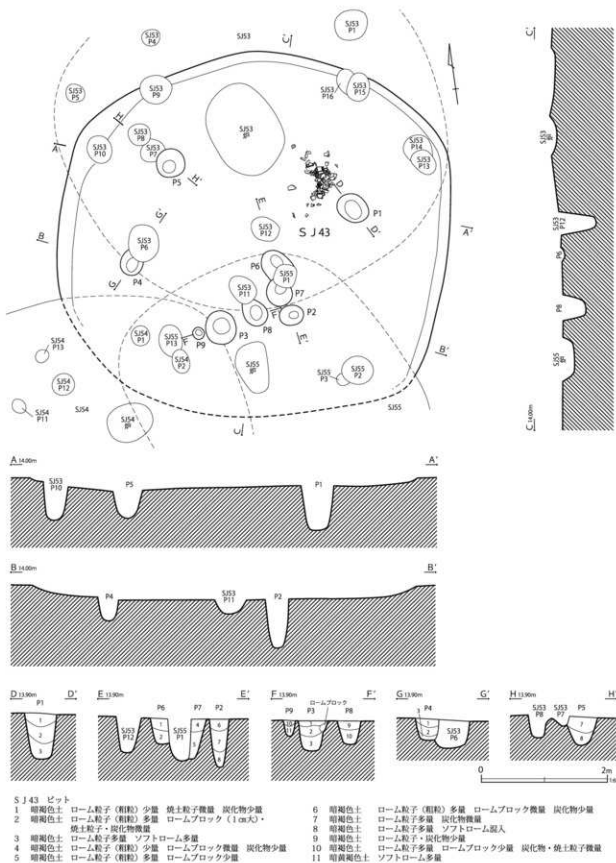
20は無文帯を持つ頸部の破片である。

21～28は胴部である。沈線で懸垂文が施文されている。21の地文は撚糸文Lである。沈線で磨消懸垂文が施文されている。22～28は胴部に磨消懸垂文が施される。地文として、22・23・26は単節LRLの縄文が施文される。24・28は複節LRLの縄文が施文される。25・27は単節LRLの縄文を地文としている。

29～31は口縁部が無文となる深鉢形土器である。31は頸部に隆帯が巡らされている。

32は大木式系の深鉢形土器の胴部片で、隆帯で大小の渦巻文が施文される。

33～37は連弧文系の深鉢形土器である。33・34は口縁部の破片である。33は口唇下に3本1組の沈線が巡らされている。3本のうち上部の2

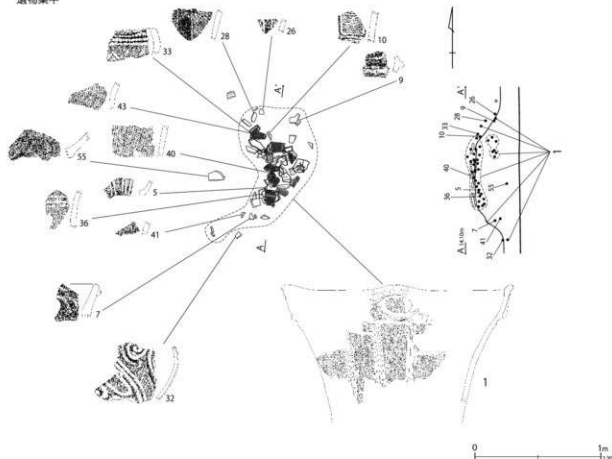


第218図 第43号住居跡

第36表 第43号住居跡柱穴計測表（第218図）

番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ
P 1	54.0	73.0	P 2	39.0	76.0	P 3	53.0	47.1	P 4	36.0	36.1	P 5	46.0	44.3
P 6	42.0	41.9	P 7	44.0	61.0	P 8	41.0	36.0	P 9	21.0	24.0			

遺物集中



第 219 図 第 43 号住居跡遺物出土状況

本内に円形刺突文が施文される。胴部には連弧文の 1 部が残存している。35～37 は頸部から胴部の破片である。33・37 の地文は単節 L R の縄文で、36 は単節 R L の縄文である。34 は撚糸文 L が縦方向に施文される。35 は条線が施される。

38・39 は曽利式系の深鉢形土器である。38 は同心円状に沈線文が施文される。31 の地文は櫛歯状条線である。

40～50 は地文のみが施文される深鉢形土器の胴部である。40・41・43・46 は撚糸文 L、42 は撚糸文 R が施文される。44・47 は単節 R L の縄文が、45 は単節 L R の縄文が施文される。48～

50 は条線が施文される。

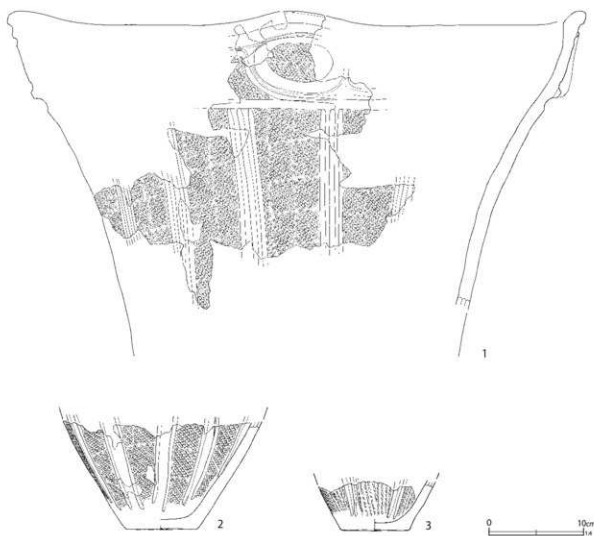
51 は深鉢形土器の底部である。

52～55 は浅鉢形土器である。いずれも赤彩の痕跡は認められなかった。52・53 は口縁部である。54 は肩部で、隆帯によって文様が施文される。55 は底部である。

第 222 図 56～58 は出土した石器である。

56 はスクレイパーである。粗雑な作りで、剥片の縁辺に、最低限の剥離調整が加えられる。表面は風化面が残存している。

57 は石皿の破片で、大型のものである。表面は緩やかな傾斜面が残されている。裏面には敲打



第 220 図 第 43 号住居跡出土遺物 (1)

痕と漏斗状の凹部が残されている。

58 は敲石である。側縁部には、敲打痕が残されている。

第 44 号住居跡 (第 223 ～ 228 図)

第 44 号住居跡は、V-18 グリッドに位置する。第 46 号住居跡に壊されている。南壁は近世の第 18 号溝跡によって壊されている。平面形態は隅丸方形である。炉と柱穴を基準とした主軸方位は、 $N-0^\circ$ である。規模は長径 6.10 m、短径 4.60 m、深さ 0.18 m である。

柱穴は 27 本が検出された。主柱穴は P1・P2・P3・P4・P15 と考えられる。P9 もそれら

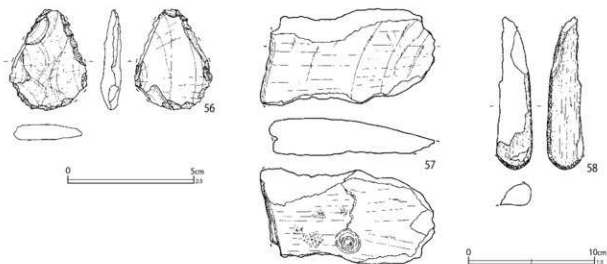
と同一の土層であることから、同時期に利用されていた可能性がある。しっかりとした柱穴は他にも検出されており、2 回以上の建て替えがされたと考えられる。

炉は中央よりやや北側から検出された。炉は埋甕炉で、平面形態は楕円形である。第 226 図 3 の浅鉢形土器が炉体土器として使用されていた。炉の規模は、長径 1.14 m、短径 0.88 m、深さ 0.31 m である。

住居跡は覆土も浅く、遺物は破片資料が散漫に出土した (第 225 図)。住居跡の時期は炉体土器や出土土器から中期中葉の勝坂式終末期である。



第221图 第43号住居跡出土遺物(2)



第 222 図 第 43 号住居跡出土遺物 (3)

第 226 図 1～6 は、器形復元が可能であった土器である。

1 は円筒形の深鉢形土器である。口縁部には 1 箇所突起を持っている。口縁は無文で、胴上部に文様が施文される。胴下部は無文である。文様は沈線で施文されるが、半截竹管によって半肉掘状に施文される部分がある。文様は方形に区画され、それを斜めに分割され三角形形状になっている。区画内は、短沈線が充填されている。口径 14.0 cm、底径 8.2 cm、残存高 26.2 cm である。

2 は深鉢形土器の胴部から底部が残存する。胴部には地文のみが施文される。地文は 0 段多条 R L の縄文で、縦方向に施される。底径 8.0 cm、残存高 10.1 cm である。

3 は炉体土器として使用された浅鉢形土器である。底部が破損している。平縁だが、1 箇所小突起状となり眼鏡状把手が貼付されている。把手下には緩やかな弧状に隆帯が貼付されている。隆帯の右端部は渦巻文が貼付される。眼鏡状把手の裏面側にも弧状の隆帯が貼付される。隆帯の端部は欠損している。弧文の中央には円文が貼付され、中央が凹まされている。他は、欠損しているため詳細は不明だが、4 単位目も施文されていたと考えられる。隆帯上のごく 1 部に赤彩の痕跡が認め

られる。口径 36.3 cm、残存高 11.8 cm である。

4 は浅鉢形土器の胴部の破片である。肩部には弧状に貼付された隆帯の一部が残存している。両面ともに赤彩の痕跡は認められなかった。残存高 7.9 cm である。

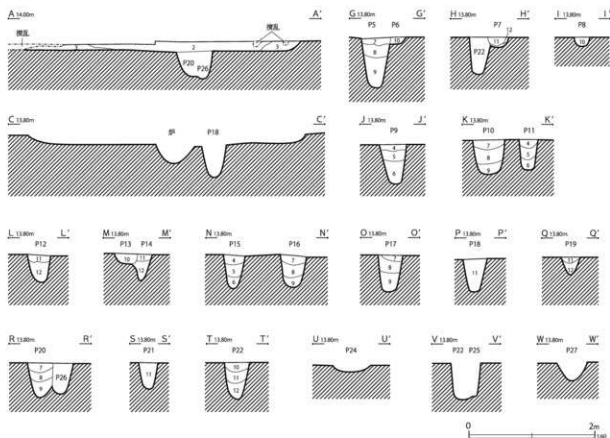
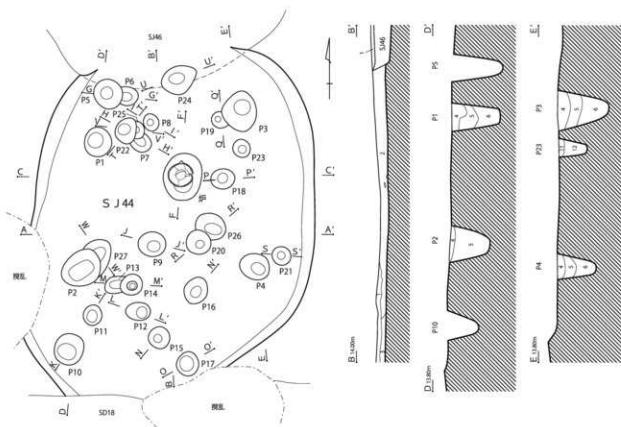
5 は浅鉢形土器の底部である。器面は丁寧な調整が施されている。底径 9.0 cm、残存高 4.5 cm である。赤彩の痕跡は認められなかった。

6 は浅鉢形土器の底部である。器面は剥落が著しい。部分的に器面が残存している。推定される底径 6.0 cm、残存高 3.3 cm である。

第 227 図 7～50、第 228 図 51～82 は出土した土器の破片資料である。

7～24 は阿玉台式系の深鉢形土器で、阿玉台式系と勝坂式系の折衷的な土器も含む。7 は把手の破片で、口縁や隆帯に沿って、三角押文が施文される。8～17 は、角押文が施文されるもので、9 は口縁部に楕円区画文が施され、その内側に角押文が 2 列施文される。18～22 は細沈線で文様が施文されるもので、18・19 は波状文が施文される。23・24 は爪形文が施される。

25～32・34・36・38 は隆帯脇に爪形文が施文され、それに沿って波状文などが施文される深鉢形土器で、藤内式と考えられる。25～27 はペ



第 223 图 第 44 号住居跡 (1)

S J 44

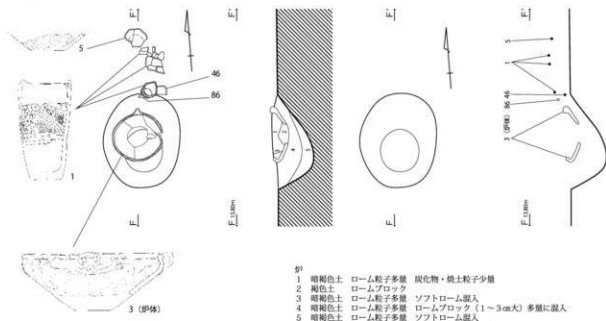
- 1 暗褐色土 ローム粒子（粗粒）少量 焼土粒子微量 炭化物少量
 2 暗褐色土 ローム粒子多量 炭化物少量 ロームブロック微量
 3 暗黄褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック密に多量

ビット

- 1 暗褐色土 ローム粒子（粗粒）多量 炭化物少量 しまり強い
 2 暗褐色土 ローム粒子（粗粒）多量 ロームブロック微量 しまり強い
 3 暗褐色土 ローム粒子多量 しまり強い
 4 暗褐色土 ローム粒子（粗粒）少量 ロームブロック微量 炭化物少量 しまり強い

- 5 暗褐色土 ローム粒子（粗粒）少量 炭化物微量
 6 暗褐色土 ローム粒子多量 ソフトローム混入、しまり強い
 7 褐色土 ローム粒子多量 ソフトローム多量に混入
 8 暗褐色土 ローム粒子（粗粒）多量 炭化物少量
 9 暗褐色土 ローム粒子多量 ロームブロック・炭化物微量
 10 暗褐色土 ローム粒子（粗粒）多量 ロームブロック（1～2cm大）微量 炭化物少量
 11 暗褐色土 ローム粒子（粗粒）多量 ロームブロック（1～4cm大）・炭化物少量
 12 暗褐色土 ローム粒子多量 ソフトローム主体

炉



第224図 第44号住居跡(2)

第37表 第44号住居跡柱穴計測表(第223図)

番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ
P 1	47.0	76.5	P 2	55.0	64.0	P 3	57.0	80.5	P 4	47.0	62.0	P 5	48.0	78.1
P 6	31.0	11.6	P 7	29.0	15.3	P 8	28.0	13.2	P 9	44.0	62.0	P 10	50.0	49.2
P 11	31.0	48.5	P 12	39.0	43.3	P 13	27.0	14.7	P 14	35.0	38.5	P 15	34.0	53.6
P 16	38.0	52.3	P 17	36.0	57.7	P 18	38.0	51.2	P 19	28.0	29.5	P 20	40.0	53.3
P 21	30.0	43.1	P 22	40.0	58.3	P 23	28.0	44.6	P 24	50.0	12.5	P 25	28.0	52.0
P 26	49.0	51.5	P 27	59.0	29.6									

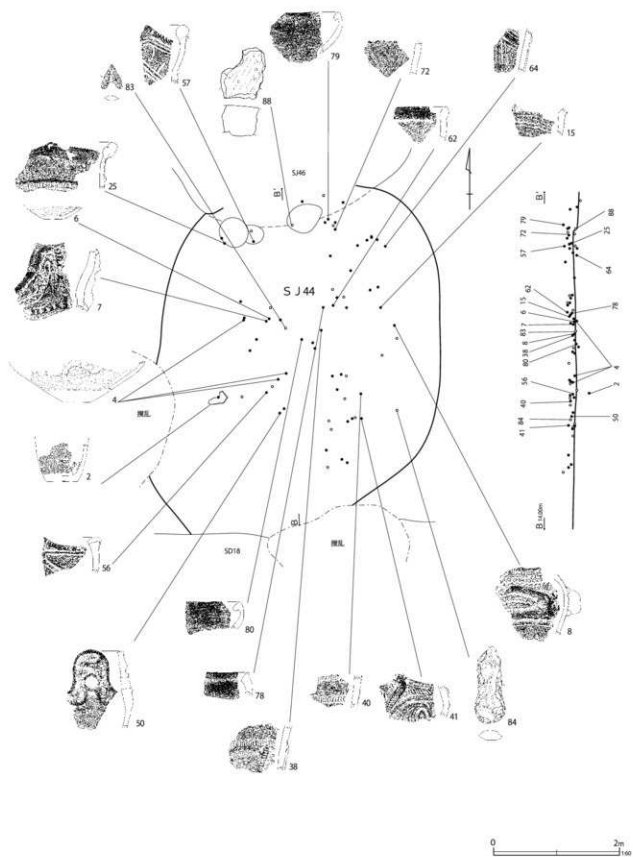
ン先状の三角押文が施文されるもので、古い様相を持っている。25は口縁部の破片で、器面には補修孔が穿たれている。30は三角形の区画内、三叉文が施文される。

33・35・37・39～46は隆帯脇に沈線文が施文される勝坂式末葉の深鉢形土器である。隆帯上には刻みが施文される。33・35・37・39・40は沈線に沿って爪形文が施文される。37・39・40は爪形文に沿って蓮華文が施文される。41は沈線間に結節沈線文が施文される。

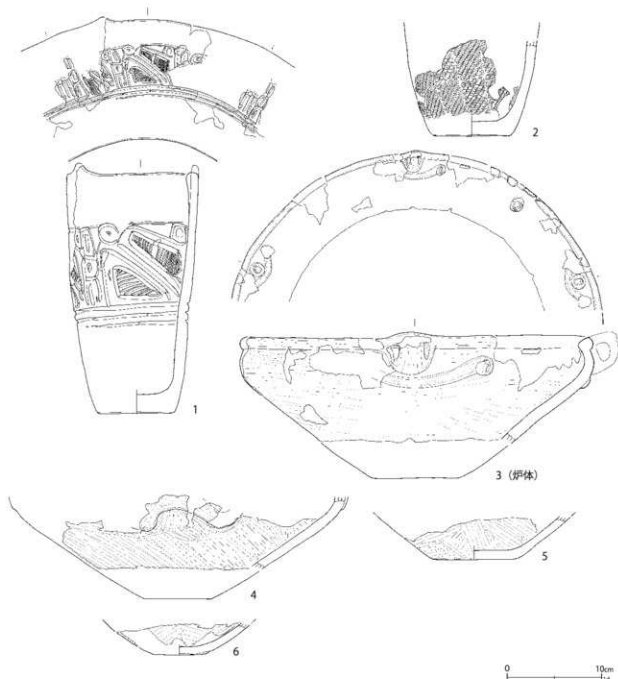
47～55は隆帯が貼付されない勝坂式末葉の深鉢形土器である。50は把手部分で、中央部は円孔が穿たれている。

56～66は地文が施文される勝坂式末葉の深鉢形土器である。56は無節R、57～60・62・63・65・66は単節RL、61・64は単節LRが地文として施文される。64は隆帯上に施文される。

67は加曾利E式系のキャリパー形の深鉢土器の口縁部である。撫糸文Lが地文として縦方向に施文される。



第 225 图 第 44 号住居跡遺物出土状況



第226図 第44号住居跡出土遺物(1)

68～73は地文のみが施文される深鉢形土器の胴部である。68・69・71は撚糸文L、70は撚糸文R、72・73は単節RLの縄文を縦方向に施文されている。

74～77は深鉢形土器の底部の破片である。

78～82は浅鉢形土器である。78は、黒色に施文されたと考えられる文様が、部分的に残存して

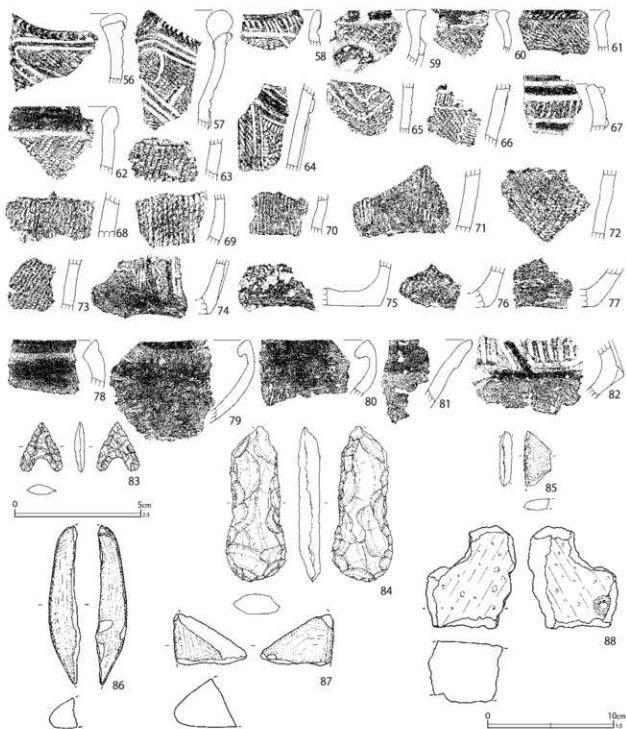
いる。79～81は無文の口縁部で、赤彩は残存してなかった。82は、屈曲する肩部に文様帯が施文されるものである。隆帯と沈線で文様が施文される。内面には、赤彩の痕跡がわずかに認められる。

第228図83～88は出土した石器である。

83は石鏃である。無茎で、基部は逆U字状に深く抉りが入る。



第227图 第44号住居跡出土遺物(2)



第 228 図 第 44 号住居跡出土遺物 (3)

84・85 は打製石斧である。84 はほぼ完形で、刃部に最大幅を持つ楕形である。刃部は丸刃で、側縁はわずかに挟りが入っている。85 は小破片で、表面のみが残存するもので、自然面が大きく残っている。

86 は敲石である。右半分を欠損するもので、縦長である。側縁に敲打痕が残存している。

87 は磨石で、ごく一部が残されていた。

88 は石皿の小破片で、裏面に漏斗状の凹部が作られている。

第 45 号住居跡 (第 229 ～ 235 図)

第 45 号住居跡は、U・18・V・17・18 グリッドに位置する。周辺は遺物包含層で、多量の土器片が含まれていた。1 層の精査後に改めて遺構の確認を行なったところ、住居跡が検出された。掘り込みはごく浅く、第 46 号住居跡を壊している。平面形態は隅丸方形である。平面形態と炉を基準とした主軸方位は、N-0°である。規模は長径 5.80 m、短径 4.90 m、深さ 0.09 m である。柱穴は 9 本が検出された。主柱穴はなく、壁柱穴状に配置されたと考えられる。

炉はほぼ中央から検出された。地床炉で、炉の形態は不整形である。規模は長径 0.70 m、短径 0.62 m、深さ 0.13 m である。

遺物は、住居跡全体から散漫に出土した (第 231 図)。その中でも、北側には遺物が集中した箇所があった (第 230 図)。土器片や石器片が平坦に敷くように検出されたもので、底面に土器敷が行なわれた土壌の可能性が考えられる。出土遺物の時期は、住居跡出土土器との大きな時期差はなかった。

住居跡の時期は出土遺物から中期末葉の加曾利 E III 式期と考えられる。

第 232 ～ 235 図は出土した遺物である。

第 232 図 1 ～ 3 は器形復元が可能であった土器である。

1 はキャリパー形の深鉢形土器の口縁から胴部の破片である。遺物集中地点から検出された。器形は崩れ、口縁部の内湾も緩やかで胴部に至っている。口縁部文様帯は楕円形区画文や渦巻文が隆帯とそれに沿った幅広のナゾリ状の沈線が施文されている。胴部には沈線が逆 U 字状文を描き、内側に地文が施文される。地文は単節 R L の縄文

が斜めから縦方向に施される。推定口径 39.0 cm、残存高 19.1 cm である。

2 は深鉢形土器の口縁から胴部である。口縁は 4 単位の緩やかな波状口縁である。口縁部文様帯は隆帯を方形に区画され、区画内に対向する渦巻文が施文される。隆帯には幅広の浅い沈線を沿わせている。胴部には、2 本 1 組の沈線による磨消懸垂文を垂下させている。地文は単節 R L の縄文で、縦方向に施文されている。推定口径 34.0 cm、残存高 29.5 cm である。

3 は深鉢形土器の頸部から胴部である。遺物集中地点から検出された。頸部と胴部はそれに沿わせた幅広の浅い沈線で区画されている。胴部 2 本 1 組の磨消懸垂文で、垂下する懸垂文や渦巻文が施されている。地文は文様の形状に沿って施文されている部分がある。地文は単節 L R の縄文である。残存高 21.2 cm である。

第 233 図 4 ～ 36、第 234 図 37 ～ 71 は出土した土器の破片資料である。

4 ～ 21 は中期中葉の勝飯式系や阿玉台式系の土器である。

4 ～ 6 は阿玉台式系の深鉢形土器である。胎土に金雲母が多量に含まれる。

7 ～ 10 は藤内式である。9・10 は結節沈線文や、ペン先状の結節沈線文が施文される土器で、古い様相を持っている。7・8 は隆帯脇にキョウビラ状爪形文が施文される。

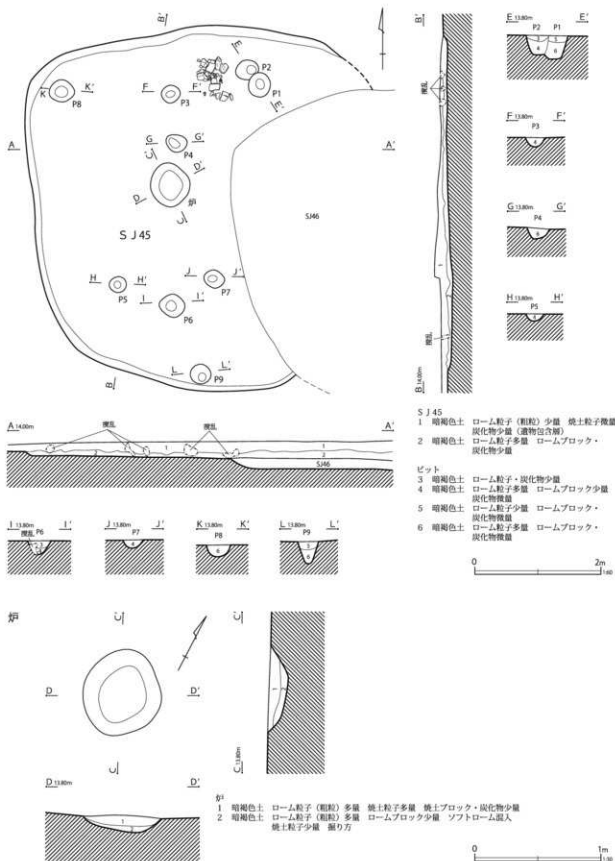
11 から 21 は隆帯脇に沈線を施文する勝飯式末葉の土器で、隆帯上には刻みが施される。

22 ～ 61 は中期中葉の土器である。

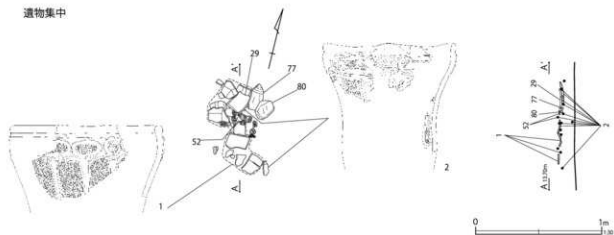
23 ～ 52 は加曾利 E 式系の深鉢形土器で、器形はキャリパー形である。加曾利 E III 式の磨消懸垂文が施文される土器が主体を占める。

第 38 表 第 45 号住居跡柱穴計測表 (第 229 図)

番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ	番号	長径	深さ
P 1	39.0	37.6	P 2	37.0	29.2	P 3	28.0	13.8	P 4	32.0	19.4	P 5	25.0	14.2
P 6	38.0	22.8	P 7	31.0	13.4	P 8	36.0	17.5	P 9	31.0	35.7			



第229図 第45号住居跡



第230図 第45号住居跡遺物出土状況(1)

23～37は口縁部で、隆帯によって渦巻文や楕円区画文が施文されている。23は加曾利EⅡ式で、地文は撚糸文Lが施される。他は加曾利EⅢ式と考えられる。

38～41は加曾利EⅡ式と考えられる口縁部から胴部で、38は無節Rが地文である撚糸文に使用されている。39は隆帯で蛇行懸垂文が施文される。40・41は沈線で文様が施されるもので、41は渦巻文が施文されると考えられる。

42～52は胴部で、沈線で磨消懸垂文が施文される。地文は、47～52の単節RLの縄文が主体を占める。42・43は無節Lが、44～46は単節LRの縄文が施文される。

53～56は連弧文系の土器である。53・54は口縁部の破片で、53の口唇下には円形刺突列が施文される。55は胴上部で、3本1組の沈線で連弧文が施文される。56は頸部の破片である。

22・57～61は地文が条線となる曾利式系の深鉢形土器である。22は口縁の把手部分で、円孔が穿たれた把手で、口縁部には同心円状の渦巻文が施文される。57～59は重弧文土器である。60・61はキャリパー形の器形で、楕歯状の条線が地文として施文される。

62～65は地文のみが施文される深鉢形土器の破片である。62は撚糸文R、63は0段多条RLの縄文、64は単節RLの縄文、65は条線が地文

として施文される。

66は深鉢形土器の底部である。

67～69・71は浅鉢形土器である。67は口縁下に文様帯を持ち、大きく屈曲する。文様帯には結節沈線文が施文される。中期中葉である。68は肩部に偏平な隆帯で文様が施される。71は口縁部と胴部が沈線で区画される。器面は光沢を持って丁寧に調整される。

70は壺形土器の胴部である。

第235図は出土した石器である。

72は石鏃である。基部は欠損している。

73は石鏃である。丁寧に調整が施されている。

74は磨製石斧で、器面が剥落した部分である。全体の形状は不明である。

75は打製石斧である。側縁部には敲打痕があり、器面には擦痕が認められる。破損した磨製石斧を、再加工したものと考えられる。

76は敲石で下端が欠損する。側縁部に敲打痕がある。表裏面にも敲打痕が認められる。

78は磨石で、下側と裏面が剥落して失われている。中央には敲打痕が残されている。

77・79～81は石皿の破片である。縁部分を残し、加工されたもので、表面中央は凹みを付けている。77は遺物集中地点から出土した。いずれの石皿も、裏面には漏斗状の凹部と敲打痕が認められる。